

文を配する。

79は胴部片であり、撚糸文に長楕円形の沈線文を描く。加曾利 E I 式である。

80、81は中峠系の波状口縁を呈する土器である。80は口縁部に刻みを有する隆帯を蝸局状に巻き上げた円錐状突起を配する。81は波頂部を肥厚させ、半裁竹管による弧状の窪みを3か所施す。

82は波頂部が肥厚し、口唇部直下に幅の狭い楕円形区画文を配する。胴部との境は強く屈曲し、横位の隆帯を廻らす。

83は加曾利 E III 式の深鉢形土器である。キャリパー形を呈し、地文である RL の単節縄文を器面全面に施す。蕨手文と逆 U 字状文を単体、複数、あるいは組みにして描く。

84、85は条線により地文を施す加曾利 E IV 式の土器である。86は口唇部が外反する早期の土器で井草式であろう。

9号住居跡（第109図、第22表）

住居跡は、G7・G8グリッドに位置する。主体部の半分程度は調査区外である。平面形は南東に張り出しをもつ柄鏡形を呈する。調査範囲で長径は主軸方向で3.8m、深さは0.2mで、このうち柄部の長さは2.5m、深さ0.15m、幅は0.95mである。主軸はN-32°-Eを指向する。壁の立ち上がりは緩やかで、壁溝はない。住居の覆土は焼土粒子、炭化物粒子を含む茶褐色土を主体とする。炉跡は調査区外のエリアに位置すると想定される。

柄部と主体部の接続部でそれぞれ埋甕を検出した。接続部の埋甕は3個体の深鉢形土器の下半部を壊し、三重の入れ子の状態にして埋設していた。また最も内側からは器台が正置して検出された。掘り方の規模は長径95cm、短径60cm、深さ16cmで、平面形は不整円形を呈する。柄部先端の埋甕は深鉢形土器を正置して埋設する。規模は長径55cm、短径30cm、深さ22cmであった。平面形は不整円形を呈する。

また、柄部と接続部の東側では下半を欠いた小型深鉢形土器の埋設遺構が検出されている。規模は長径28cm、短径26cm、深さ12cmで、平面形は円形を呈する。

ピットは床面から4基検出されており、それぞれが支柱穴と考えられる。このうちP2、P3は「ハ」字形に開く対ピットである。それぞれの深さはP1-45.3cm、P2-49.7cm、P3-41.2cm、P4-58.4cmである。

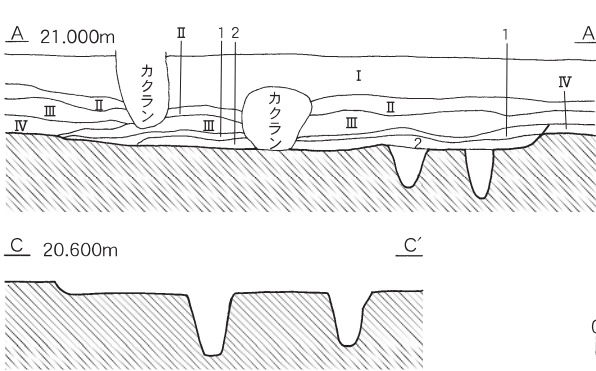
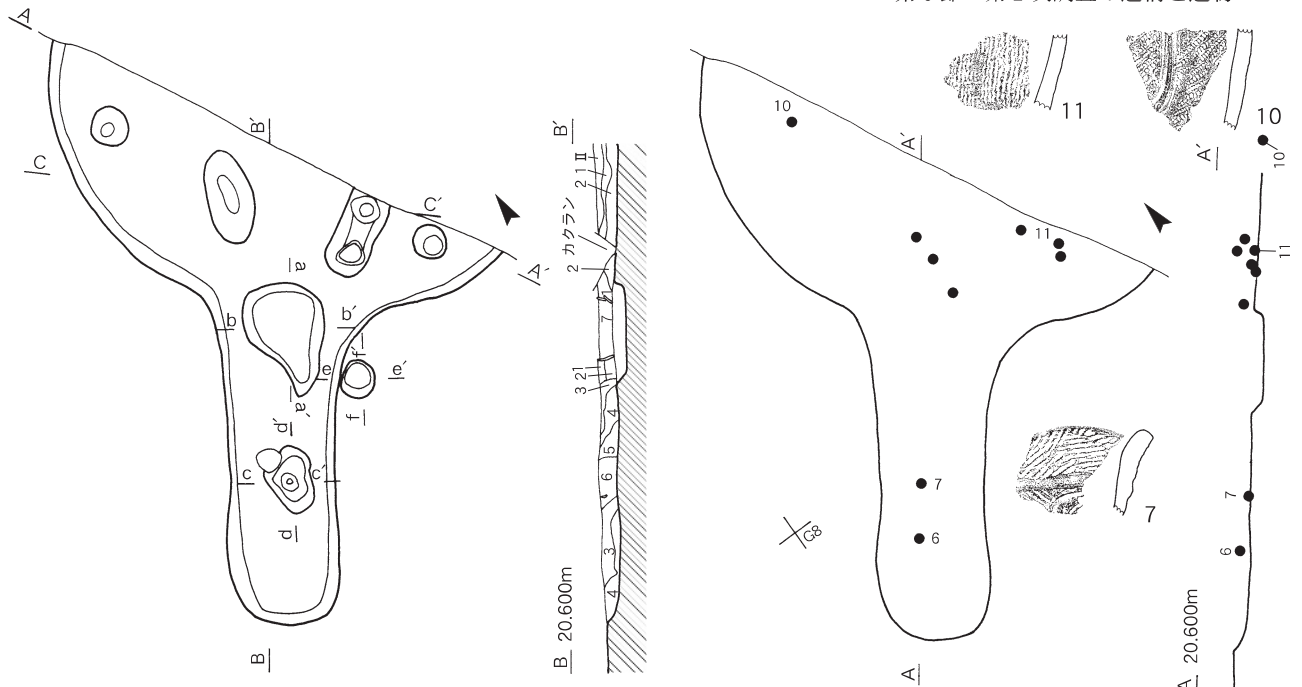
住居跡の帰属時期は加曾利 E III 式期であると考えられる。

第22表 9号住居跡柱穴計測表 (単位:cm)

	長径	深さ		長径	深さ
P1	30.0	45.3	P3	66.0	41.2
P2	78.0	49.7	P4	28.0	58.4

9号住居跡出土土器（第110～111図）

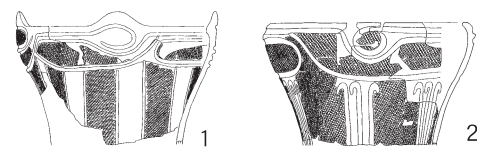
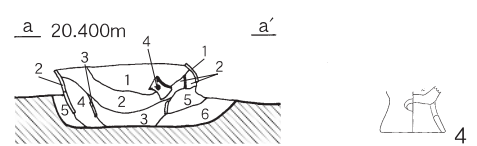
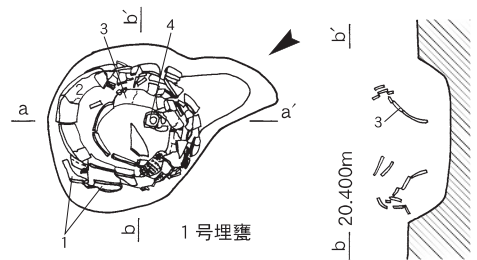
1～3は接続部に位置していた埋甕である。1は最も内側に位置する深鉢形土器で、口縁部から胴部上半まで復元が可能であった。キャリパー形を呈し、胴部はやや外反しながら立ち上がり、口縁部でわずかに内湾して口唇部が内側に屈曲する。口唇部に付された山形の突起は直立し、4単位に廻ると考えられる。口縁部文様帯は隆帯で描かれ、器面を大きくクランクしながら横走り、楕円形の区画文を描く。また突起の直下には、これに対応するように渦巻文を配す。それぞれの区画内には RL の単節縄文を施す。胴部文様帯は口縁部文様帯の直下から懸垂文が派生して構成される。太い沈線が1周で20本垂下すると考えられ、内部を



- 第I～IV層 (表土・旧表土)
- 第1層 茶褐色土 炭化物粒子若干含む
 - 第2層 黄茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子若干含む
 - 第3層 褐色土 ローム粒子・焼土粒子若干含む
 - 第4層 明褐色土 炭化物粒子・焼土粒子若干含む
 - 第5層 明茶褐色土 炭化物粒子若干含む
 - 第6層 暗褐色土 ローム粒子、炭化物粒子多く含む
 - 第7層 暗赤茶褐色土 ローム粒子、炭化物粒子多く含む

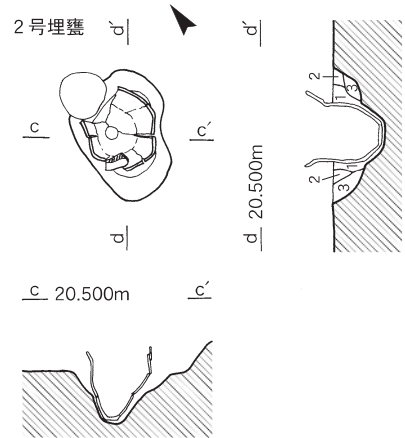
0 1 : 60 2m

- 1号埋壘
第1層 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子若干含む



- 3号埋壘
第1層 褐色土 ローム粒子・焼土粒子若干含む
第2層 茶褐色土 ロームブロック・炭化物粒子含む

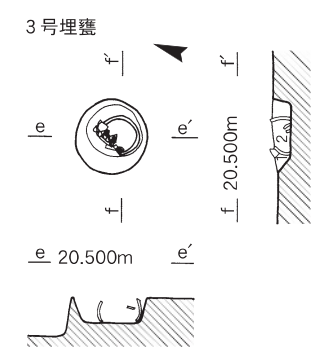
- 第2層 茶褐色土 炭化物粒子若干含む
第3層 暗黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子若干含む
第4層 明褐色土 炭化物粒子若干含む



- 2号埋壘
第1層 暗褐色土 ローム粒子若干含む
第2層 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子若干含む
第3層 黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子若干含む

0 1 : 30 2m

- 第5層 褐色土 ローム粒子若干含む
第6層 黄茶褐色土 ローム粒子若干含む



第109図 9号住居跡・同遺物出土状況

無文部と地文部として交互に配する。復元口径は43.0cm、残存高は28.0cmである。胎土には片岩の細片を含む。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、焼成は良好である。

2は1の外側に埋設されていた深鉢形土器で、平口縁である。胴部の立ち上がりは直線状で口縁部は内湾する器形である。口縁部文様帯は隆帯がクランク状に横走り、胴部文様帯に近づく位置で、太い沈線へと変化して区画文を構成する。渦巻文は口唇部直下に4単位が配されるものと考えられ、楕円形の区画文の一部を窪ませて配する。このため口縁部文様帯が途切れる位置で、胴部から地文が貫入するような表現をとる。地文はRLの単節縄文で、口縁部から胴部にかけて連続して施す。胴部は地文を磨り消した部分に3本一組の蕨手文を7単位施文する。復元口径は39.5cm、現存高は26.5cmである。胎土には片岩系の細片を多く含む。色調は内外面ともに橙褐色で、焼成は良好である。

3は埋甕の最も外側に位置し、内側の土器に破片の状態で付着していたキャリパー形を呈する深鉢形土器である。平口縁を呈し、底部から外反しながら立ち上がり、口縁部ではやや強く内湾する。器面には長短交互に波状の沈線文が描かれる。それぞれ5単位が配されると考えられる。沈線文内部には縦位に短沈線が施され、長波状のモチーフの端部にはRLの単節縄文が配される。復元口径は29.5cm、現存高は17cmである。胎土には片岩の細礫を多く含む。色調は内外面ともに茶褐色を呈し、焼成は良好である。

4は柄部に南接した位置から出土した深鉢形土器である。小型で底部を欠損する。胴部は直線的で口縁部が内湾する器形である。モチーフは全面が地文で、楕描文を縦位に施す。口径は15.0cmで、現存高は10.5cmである。胎土には片岩の細礫を含む。色調は内外面ともに茶褐色であり焼成は硬緻である。

5は波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部で、口唇部直下に帯状の縄文と沈線文が横位に展開する。胴部には波状の沈線が施され、磨り消しの手法によりLRの単節縄文を施す。6は同様に波状口縁で、口唇直下から単節縄文を施し、やや外反する器形である。7は胴部片で斜状の沈線で描かれる口縁部文様帯の直下から垂下する懸垂文が描かれる。縦位の無文部と縄文帯を交互に配する。8は逆U字状の沈線文である。RLの単節縄文が磨り消し手法により施される。9は弧状の隆帯が垂下する。隆帯裾部は磨り消される。地文は撚糸文である。10は底部付近の資料で、地文は撚糸文である。

11は器台である。接続部の埋甕内に埋納された状態で検出された。脚部は「ハ」の字状に直線的に開く。円窓は台部直下に4単位開けられる。台部は皿状であり、口縁部が欠損する。底径は10.0cmで現存高は7.5cmである。胎土には砂粒を含む。色調は内外面ともに茶褐色で、焼成は良好である。

10・13号住居跡（第112・113図、第23表）

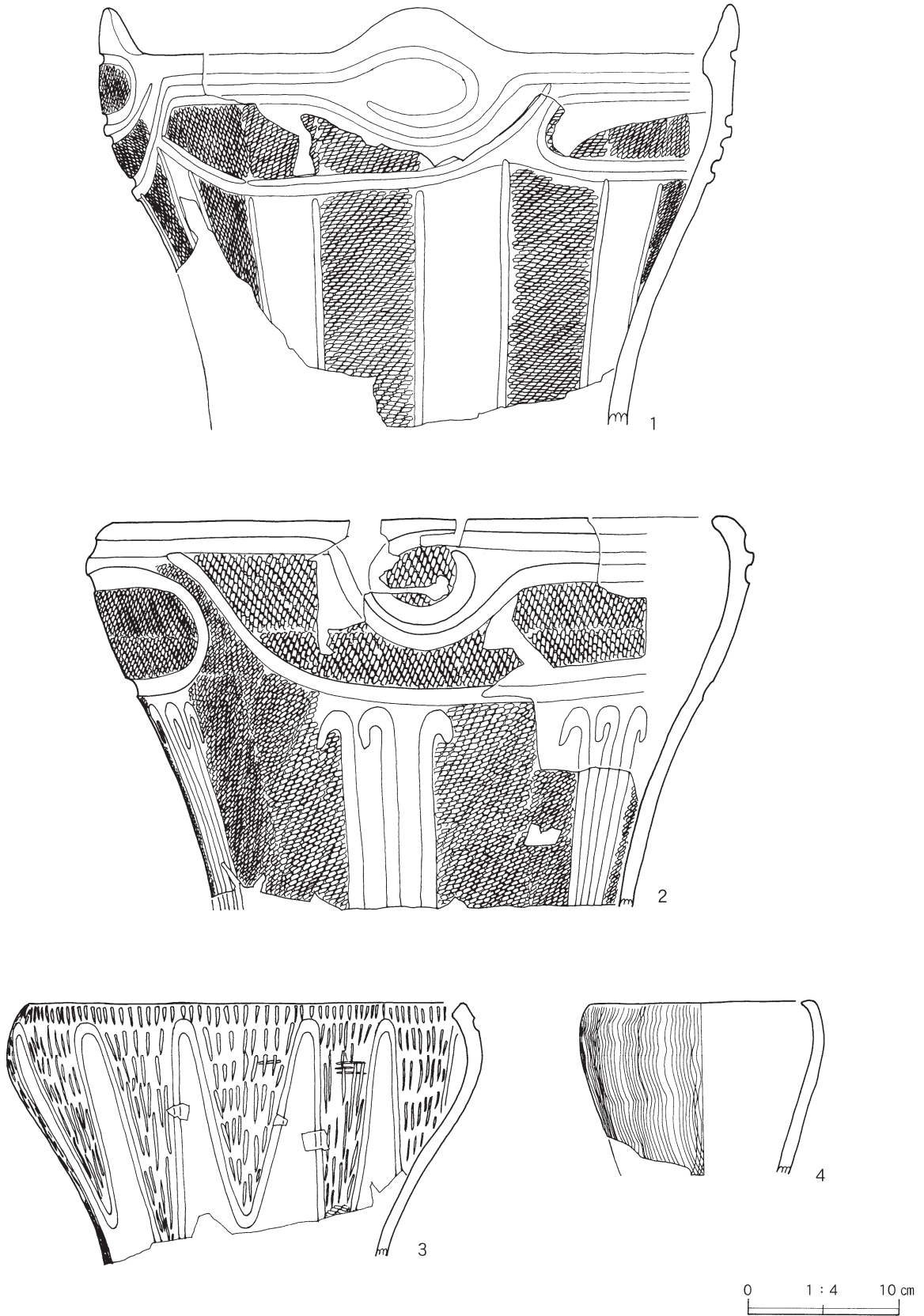
10・13号住居跡は入れ子状に検出されている。土層観察の結果、13号住居跡の埋没後に10号住居跡を構築していた。遺構はG8・G9グリッド付近に位置する。

10号住居跡のプランは隅丸長方形を呈し、長径4.05m、短径3.3m、深さ0.5mの規模である。主軸方向はN-48°-Wを指向する。床面は西に向かってわずかに傾斜し、壁面は緩やかに立ち上がる。壁溝が検出され、壁に沿って床面を一周する。

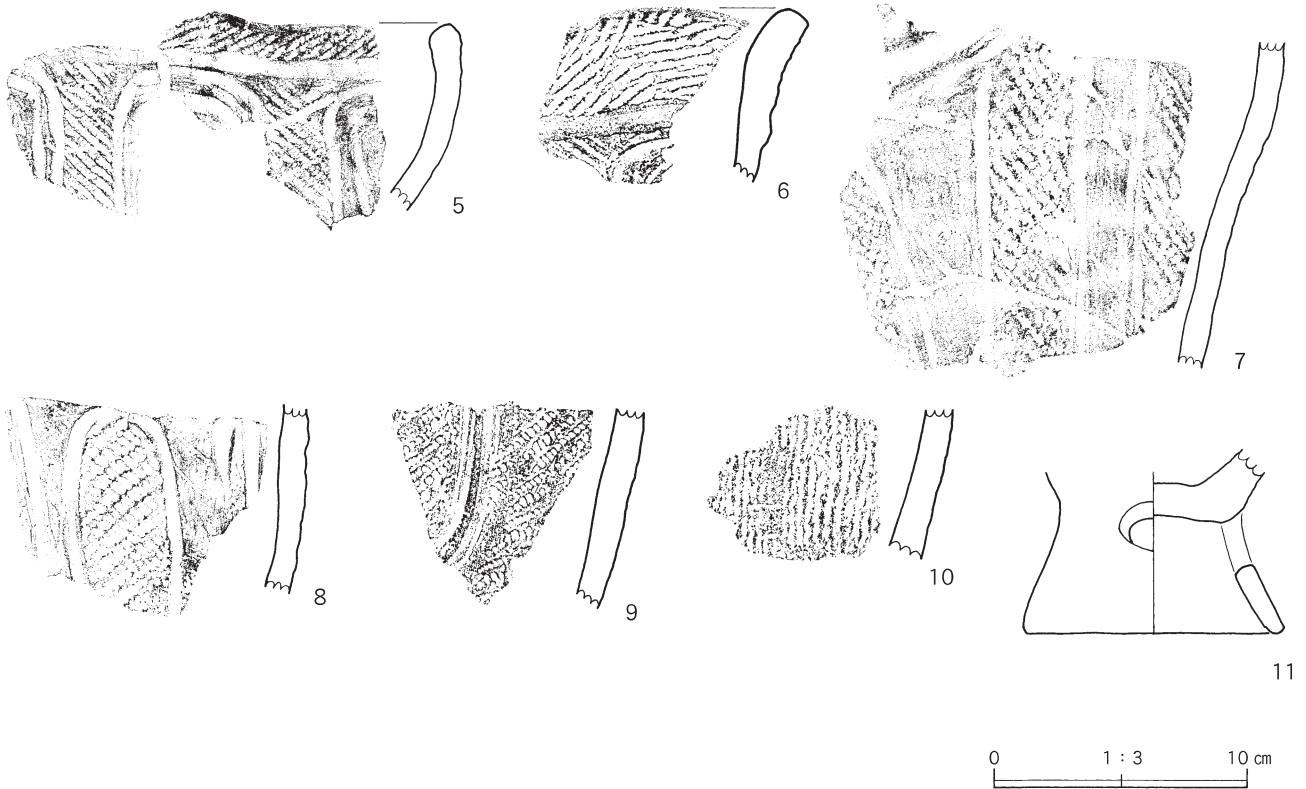
覆土は自然堆積で、焼土粒子、炭化物粒子を含む黄茶褐色土を主体とする。遺物は覆土中から多く出土し、住居跡の埋没過程において土器等を廃棄した様子がうかがえた。

炉跡は埋甕炉で、住居跡の北西部寄りに検出され、下半を打ち欠いた深鉢形土器を埋設していた。規模は長径76cm、短径70cm、深さ24cmで、平面形は楕円形を呈する。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多く含む淡茶褐色土を主体とする。主軸はN-9°-Eを指向する。

ピットは床面から5基が検出されており、このうちP11～P14が主柱穴になると想定される。それぞれの



第110図 9号住居跡出土遺物(1)



第111図 9号住居跡出土遺物（2）

ピットの深さはP11-55.3cm、P12-59.6cm、P13-50.8cm、P14-76.5cmである。

第13号住居跡の平面形は不整円形を呈し、残存した部分で長径5.9m、短径5.45m、深さ0.28mの規模である。主軸方向はN-33°-Wを指向する。床面の大半は第10号住居跡に壊されており、詳細は不明であるが、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は自然堆積と考えられ、ロームブロックを多く含む黄褐色土を主体とする。炉跡の存否は不明である。ピットは床面から9基が検出されており、このうちP1～P8は支柱穴であると想定される。それぞれのピットの深さはP1-38.6cm、P2-28.5cm、P3-80.1cm、P4-99.9cm、P5-74.4cm、P6-20.3cm、P7-69.2cm、P8-55.6cmである。

10・13号住居跡の帰属は、出土した遺物から加曾利E I 式期と考えられる。

第23表 10・13号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	116.0	38.6	P4	44.0	99.9	P7	53.0	69.2	P10	33.0	76.0	P13	38.0	50.8
P2	52.0	28.5	P5	38.0	74.4	P8	92.0	55.6	P11	64.0	55.3	P14	45.0	76.5
P3	59.0	80.1	P6	63.0	20.3	P9	37.0	83.5	P12	41.0	59.6			

10・13号住居跡出土土器（第114～118図）

本住居跡は廃絶後に土器の廃棄場になっていたと想定され、覆土中の資料が多い。このため、住居ごとの遺物の帰属を明確に判別することが困難であり、遺物は一括して掲載した。

1は炉体土器である。頸部より下半を欠損する。頸部から上は内湾して立ち上がり、口唇部が直線的に外反する器形である。口縁は平口縁でU字状の突起を口唇部に4単位を施す。口縁部文様帯は4単位の突起に対応するようにモチーフを変化させる。文様は2本隆帯で展開し、横位にC字状とクランク状の隆帯、小渦巻文とクランク、渦巻文、繋ぎ弧文と変化する。地文は燃糸文を縦位に転がす。頸部は広い無文帯である。口径は43.0cm、残存高は28.0cmである。胎土には片岩の細片を含む。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2は深鉢形土器で、住居跡の覆土中から逆位で検出された。胴部上半から口縁部までが残存する。口縁部には貫通孔の把手をもつ。ここから派生した隆帯が器面を横走し、口縁部文様帯を形成する。モチーフは把手直下の楕円形区画文が口縁部の隆帯と結節する位置で小渦巻文を描く。隆帯は胴部に移行して突起に変化し、渦巻文を描いて繋ぎ弧文となり3単位が廻る。把手部を含めると4単位を意識している。頸部は広い無文帯を有し、胴部文様帯には1条の直線状の隆帯と蛇行隆帯による懸垂文を交互に施す。口径は19.5cmで、現存高は13.5cmである。胎土には細礫を多く含み、色調は内外面ともに茶褐色を呈する。焼成は良好である。

3は浅鉢形土器である。底部から胴部は内側に強く屈曲し、口縁部はやはり強く外反する。文様帯は連続した角押文によるモチーフである。主文様は渦巻文で、ここから派生した角押文が横位に展開して胴部と区画する。また渦巻文間は横長の楕円形を角押文で描く。復元口径は50.0cm、残像高は13.0cmである。胎土には片岩の細礫を含み、色調は内外面とも明褐色を呈し、焼成は硬緻である。

4は左右に通ずる貫通孔を有する眼鏡状突起である。やや右側縁にねじれ、波頂部は二股に分かれる。5は口縁部が内屈する。波状口縁で口唇直下は交互突刺文が横位に施される。6は波状口縁の突起部である。波頂部には渦巻文が配され、ここから短隆帯が垂下する。7は口縁部片で直立する器形である。口唇部は内屈して庇状で、ここから蛇行隆帯が垂下する。

8は円筒形の深鉢形土器である。口唇直下から2本の隆帯に沿ってモチーフを縦位に展開する。9は口唇部が肥厚して刻みを加える。10は山形状の突起の一部であろう。表面は縦位の隆帯と集合沈線を描く。裏面は円状に大きく窪み、渦巻状の隆帯の端部が丸く肥厚して貼付される。

11は胴部に付く突起である。右側縁に向かって窪みを描き、周縁に刻みを施す。12、13は弧状の隆帯による区画文内に集合沈線を施す。14は2本の隆帯が途中で蛇行状となって垂下する。周囲を三叉文、三角押文、刻みなどを施す。

15～21は刻みを有する隆帯が区画文を描く。15は無文の口縁部直下の胴部片で、区画文内は太い沈線を充填する。16は楕円形区画文が横位に展開する。17は無文帯を隆帯が上下で区画している。18は内側に庇状の隆帯が廻る。19、20は口縁部無文帯直下に隆帯が廻り、三叉文が描かれる。21は胴部から突出した隆帯が口縁部無文帯に貫入する。

22は十字に平行する隆帯によって区画され、隆帯には角押文を施す。阿玉台Ⅳ式である。

23は円筒形の深鉢形土器で、沈線によりパネル文を描く。

24は半裁竹管による縦位の地文に、ヘラ状工具による押し引きを施した隆帯が垂下する。

25は勝坂Ⅲ式の胴部片で、沈線により渦巻文を描く。

26～34は阿玉台式の土器である。26はU字状の窪みがある突起部で、波頂部から板状の隆帯に沿って2列の角押文が垂下する。27は波状口縁で楕円形区画文の結節部が突起状となり、右側縁に窪みを施す。区画

文内は幅の広い爪形文を充填する。28は山形状の突起で口唇部に刻みを加える。29は平口縁の土器で、鱗状の隆帯が対向して貼付される。30は幅の広い沈線が弧状のモチーフを描き、地文の単節縄文を磨り消している。31は口縁部に展開する幅広い刻目文で、横位の隆帯を挟んで施文される。32は2列の有節沈線文によるモチーフを描く。33は弧状の隆帯に沿って複数列の角押文を施す。34は地文に単節縄文を施して角押文のモチーフを描く。

35～60はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部である。35は横S字状文を連続して施す。地文は横位に転がした撚糸文である。36は繋ぎ弧文を描く。隆帯の結節点は突起状である。37は口唇部の断面が先鋭し、隆帯は弧状に展開する。38～40は弧状の隆帯が横位に展開する。41は地文上を口縁部と平行する隆帯が途中で屈曲する。42は地文が隆帯の施文によってほとんど消される。43は渦巻文を描く突起部から2本の隆帯が派生する。44～47は波状口縁を呈する土器である。44は口縁部の隆帯が口唇に突出して突起となる。45は隆帯に沿って弧状の沈線を描く。46は口縁部文様帯がそのまま口唇部へ突出すると考えられる。47は浅い角度の山形を呈する。48は地文を施さず、隆帯が口唇部直下から派生し斜行して文様を描く。49は繋ぎ弧文の結節点に貼付した突起が渦巻文となっている。50は突起部で2本隆帯が肥厚して外側に突出する。51～53は繋ぎ弧文が口唇部直下の隆帯と結節する。51は繋ぎ弧文の直下に広い頸部無文帯を有する。52は頸部との境に隆帯を廻らして区画している。53は渦巻文をやや肥厚させて施す。

54は口縁部文様帯の地文を頸部まで連続して施す。55の頸部は無文である。56は繋ぎ弧文を施す。57は口唇部が矩形に肥厚して立ち上がり、直立する。地文は横位に転がした撚糸文である。58も直線的に立ち上がる器形である。口唇直下に渦巻文を描き、胴部とは1条の隆帯で区画する。59は頸部を区画する隆帯から渦巻文が派生する。60は胴部文様帯を上下に二分する2本隆帯の端部に渦巻文を施し、これに口唇部から垂下する短隆帯と結節する。

61～70は深鉢形土器の頸部付近である。61は頸部が無文である。62は頸部と口縁部は2本隆帯により区画する。地文は口縁部から連続しており、懸垂文を施す。63は頸部との境の隆帯が波状を呈する。64は繋ぎ弧文の結節点に渦巻文を描く。65、66は渦巻文を隆帯によって描く。67は垂下する弧状の隆帯が頸部との結節点で外側に突出する。沈線によって地文に文様を描く。68、70は頸部が無文帯となっている。69は口縁部文様帯の直下に縦位の条線を施す。

71～74は胴部片である。71、72は2本の平行する隆帯による懸垂文である。73は蛇行隆帯を貼付する。74は撚糸文の地文上に端部が丸く肥厚する隆帯を弧状に貼付する。

77は深鉢形土器の底部である。3本の平行する懸垂文を描く。底面はやや窪んでいる。

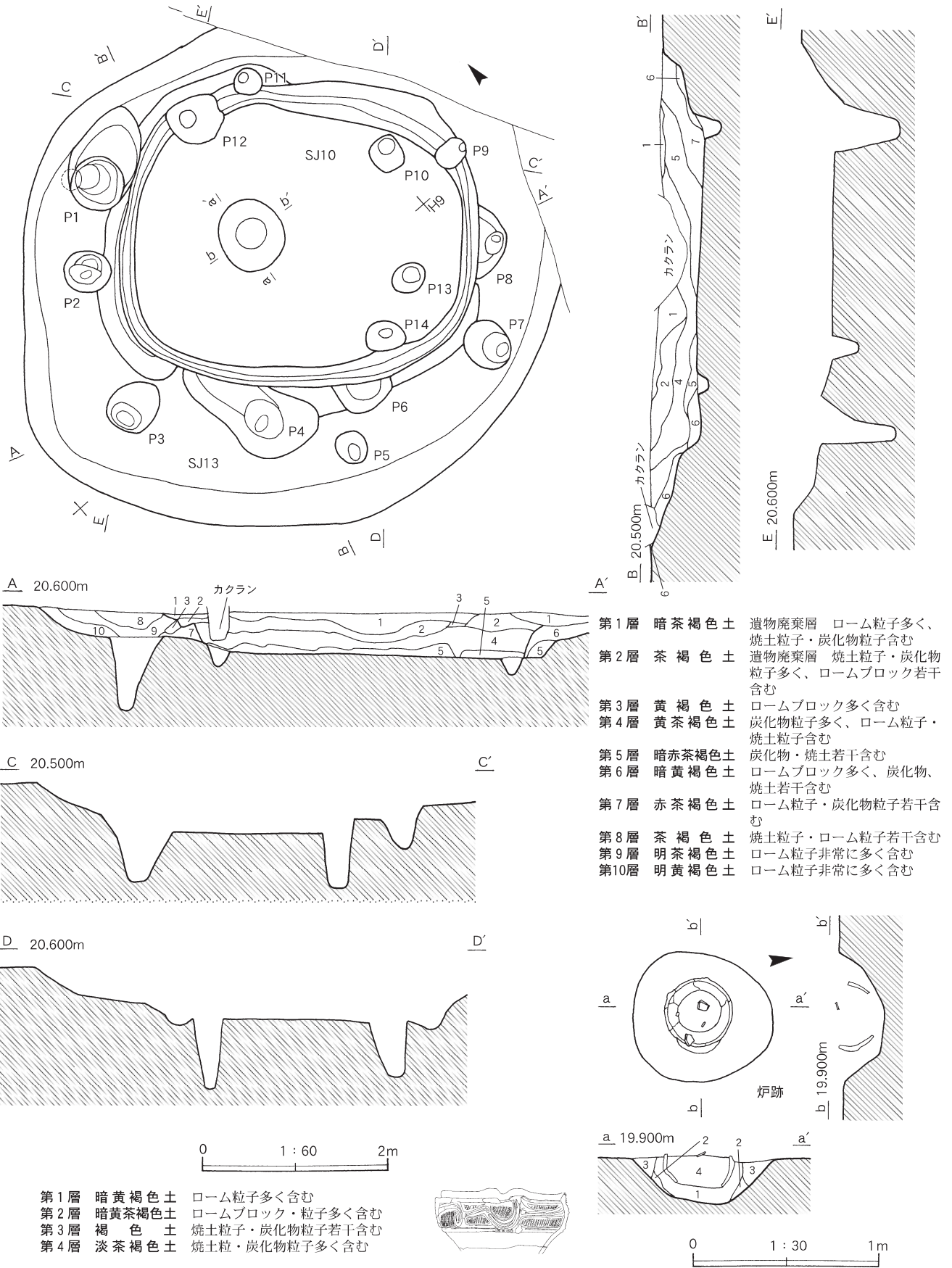
75、76、78は浅鉢形土器である。75は胴部の屈曲部に廻る隆帯から弧状の隆帯が派生する。口縁部は外反する器形である。76は口唇部で強く内屈する。78は胴部上半に最大径をもち、口唇部は矩形に肥厚する。

79は浅鉢形土器の胴部に付く大型の突起である。側縁に貫通孔を有し、下端にも方形の窪みを施す。突起は肥厚し、端部に渦巻文を描く。下方部から弧状の隆帯が結節して繋ぎ弧文の様相を呈する。

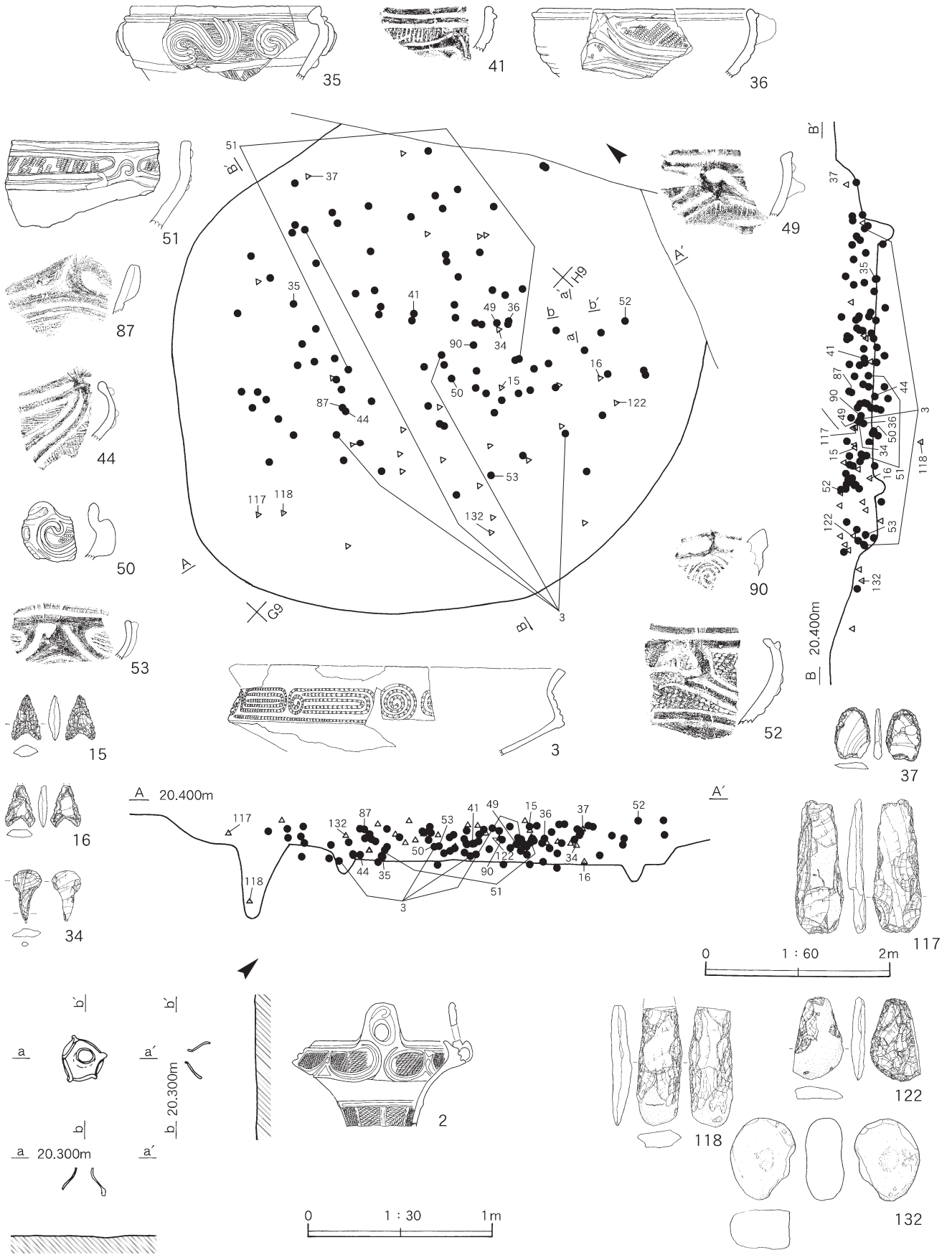
80は円筒形あるいは瓢形を呈すると想定される。複列の沈線下に縦位の隆帯列が垂下する。

81～86は連弧文土器である。81は口縁部直下に隆帯と沈線が平行して廻る。地文は縦位の撚糸文である。82は口唇部直下に交互刺突文を施し、3条の沈線がモチーフを描く。83～86は文様を上下に区画する胴部中央を廻る沈線文が描かれる。83は下部に小波状の沈線が廻る。86の地文は無節1で粗く施される。

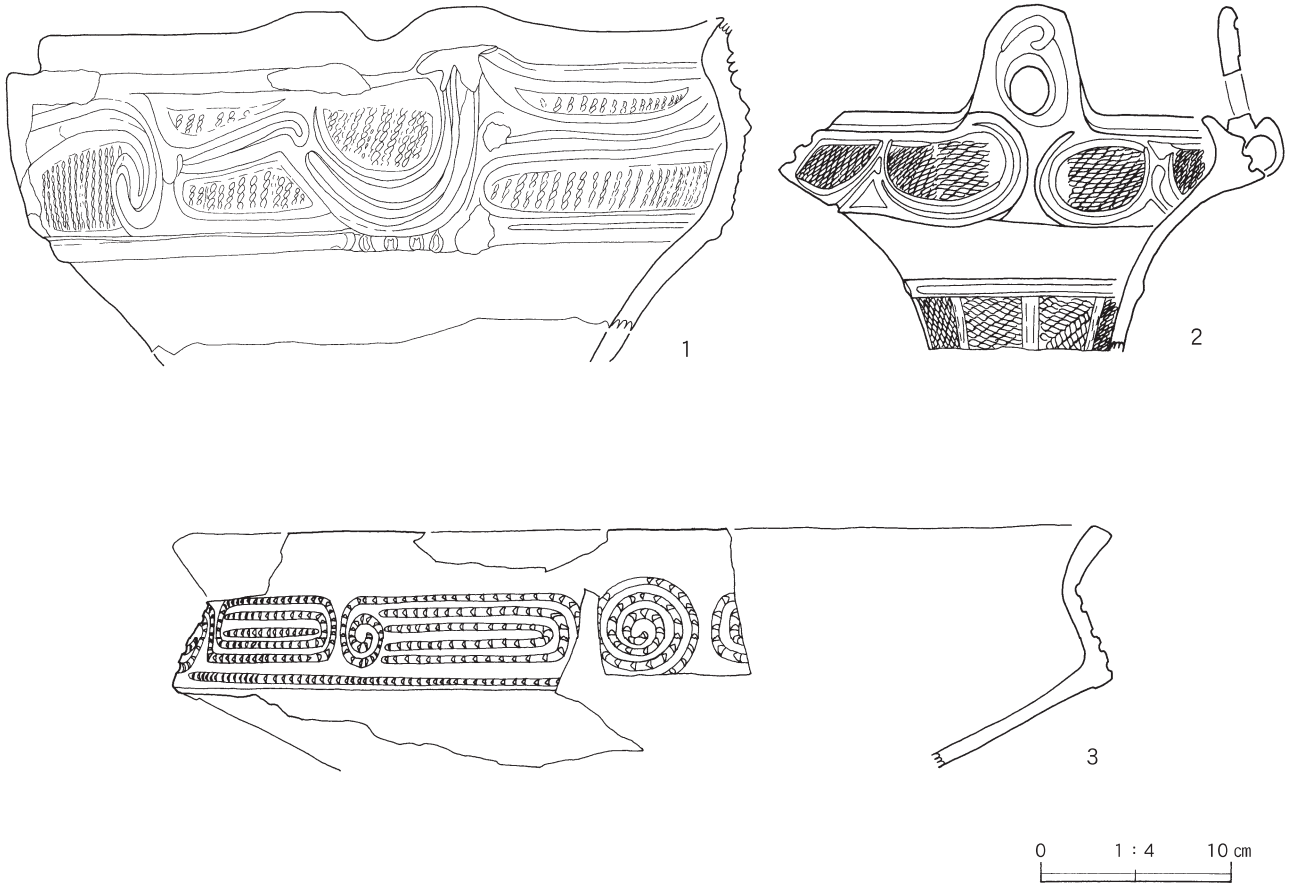
87～91は中峠系の波状口縁を有する土器である。87は波頂部がC字状に肥厚する。胴部には口縁部と平行するように沈線文、爪形文を施す。88は波頂部から派生する隆帯間に交互刺突文を施す。89は波頂部が肥厚して隆帯が垂下する。90は波頂部から垂下する隆帯が左方の隆帯と繋がって楕円形を呈し、右方に貫入して



第112図 10・13号住居跡



第113図 10・13号住居跡遺物出土状況



第114図 10号住居跡出土遺物

モチーフを連続させる。口唇部直下には突起状の密な渦巻文を沈線によって描く。91は口縁部文様帯に沈線による対向する渦巻文を描く。

92～94は地文のみを施す。加曾利 EⅢ～Ⅳ式の深鉢形土器である。

95は口唇部が内側に強く屈曲して条線を施す。外部は横位の沈線文で前期の諸磯式土器である。

11号住居跡（第119・120図、第24表）

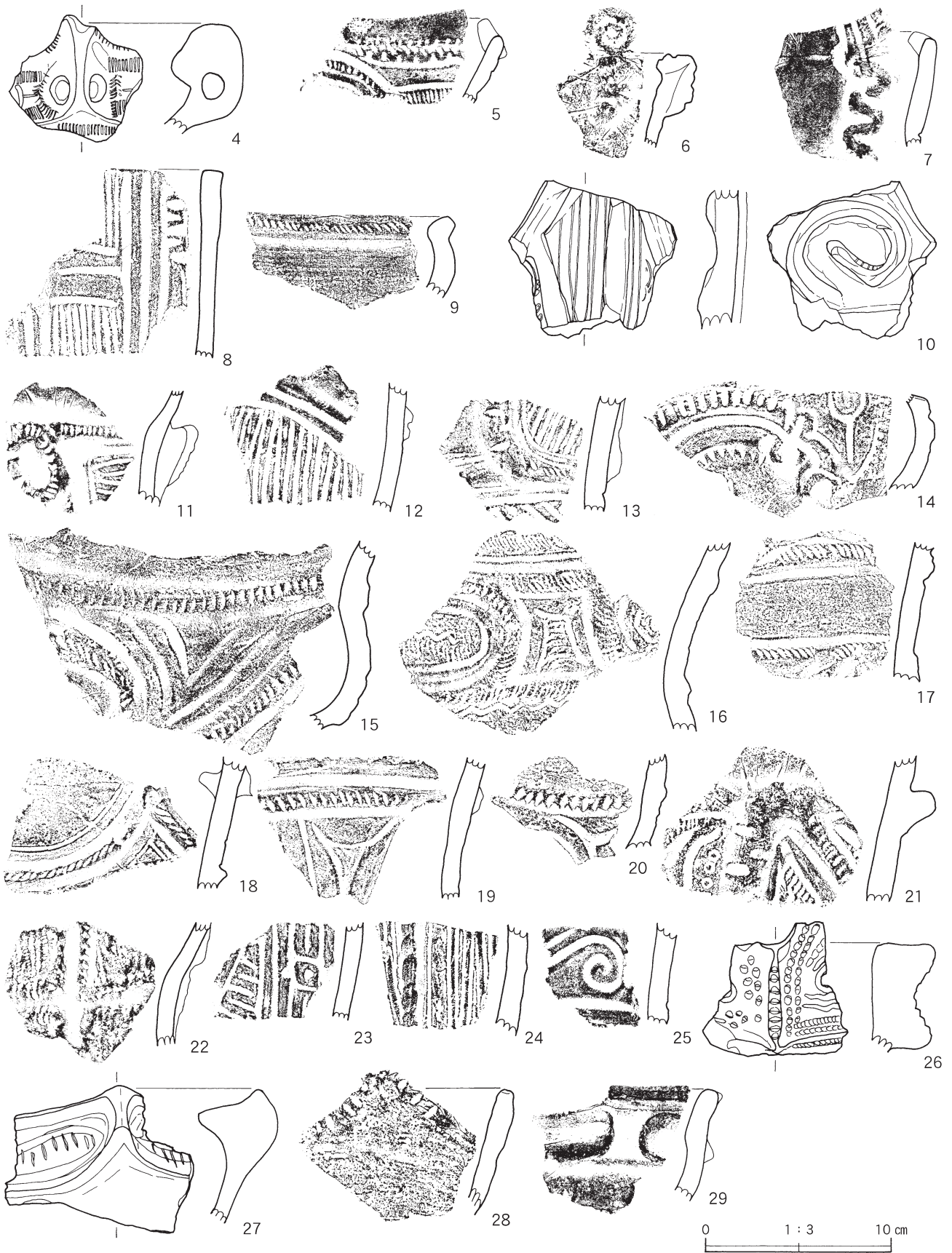
住居跡は E10 グリッド付近に位置する。12号住居跡と16号住居跡を切っている。南側に矩形の張り出し部を設け、主体部の平面形は楕円形を呈する。長径5.2m、短径3.7m、深さ0.35mの規模で、主軸は N-15°-W を指向する。

床面は東に向かってやや傾斜し、硬く締まる。壁溝は検出しなかった。張り出し部と主体部との間に溝状の浅い掘り込みを有する。壁面西側は緩やかに立ち上がるが、東、南、北側の立ち上がりは急である。

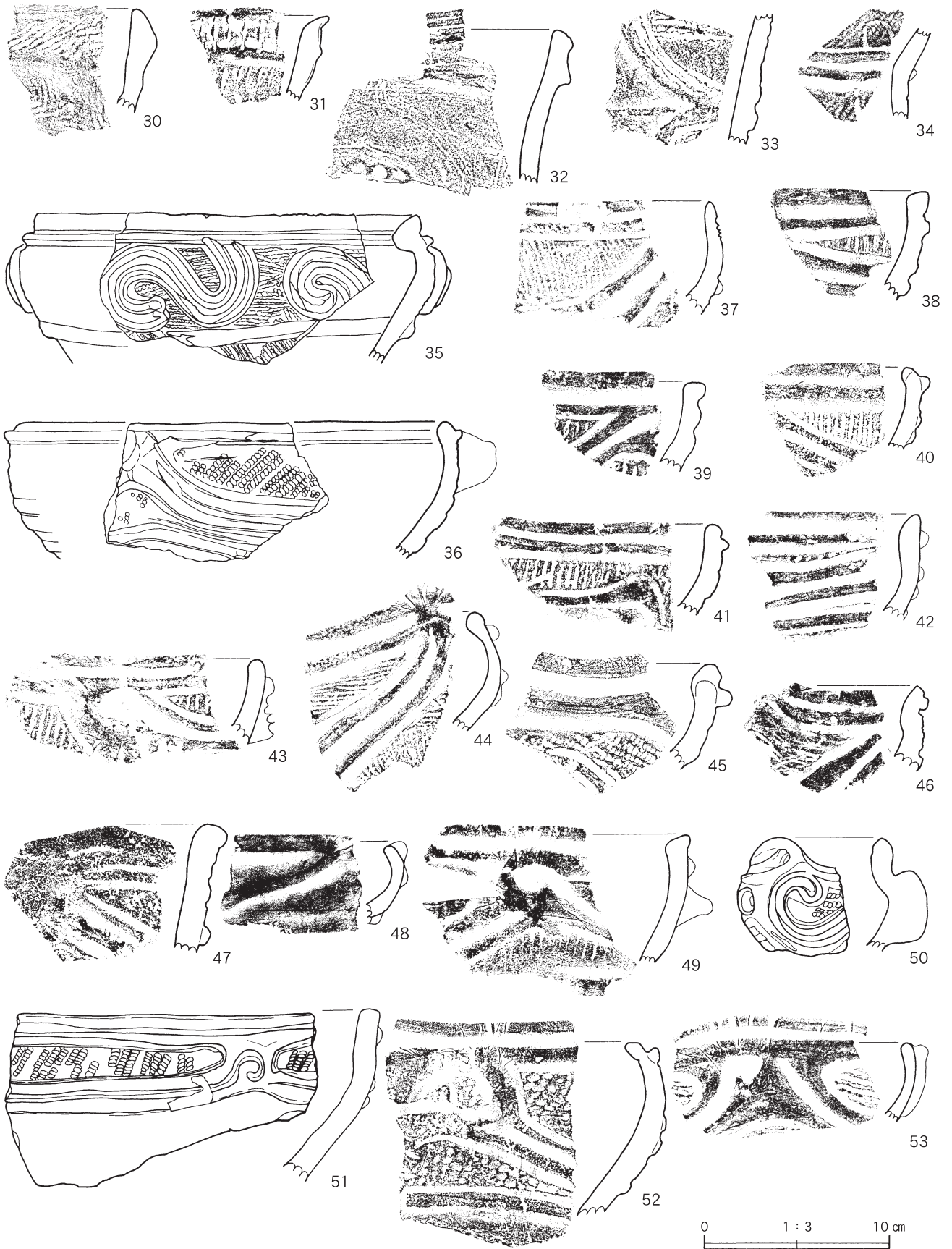
覆土はロームブロック、焼土粒子、炭化物粒子を多く含む茶褐色土が主体となる。遺物は深鉢形土器、浅鉢形土器、鉢形土器等の精製土器群が検出されたが、出土量は多くない。

炉跡は地床炉である。長径150cm、短径90cm、深さ12cmを測り、平面形はやや長い楕円形を呈する。覆土は焼土粒子、焼土ブロックを多く含む黄褐色土が主体となる。炉床面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。主軸は N-11°-E を指向する。

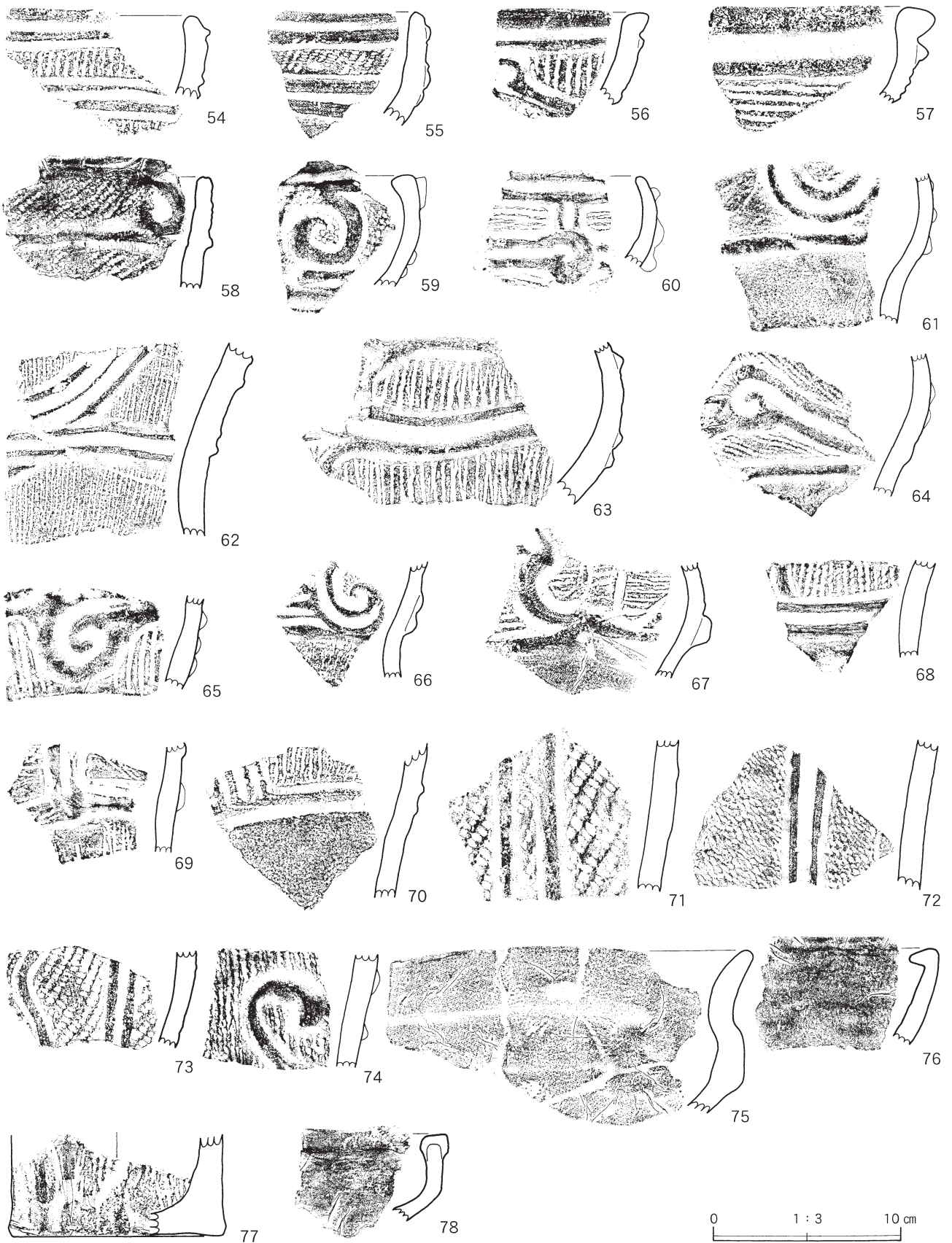
ピットは床面から19基が検出され、このうち壁際に廻る P1～P12は支柱穴になると想定される。それぞ



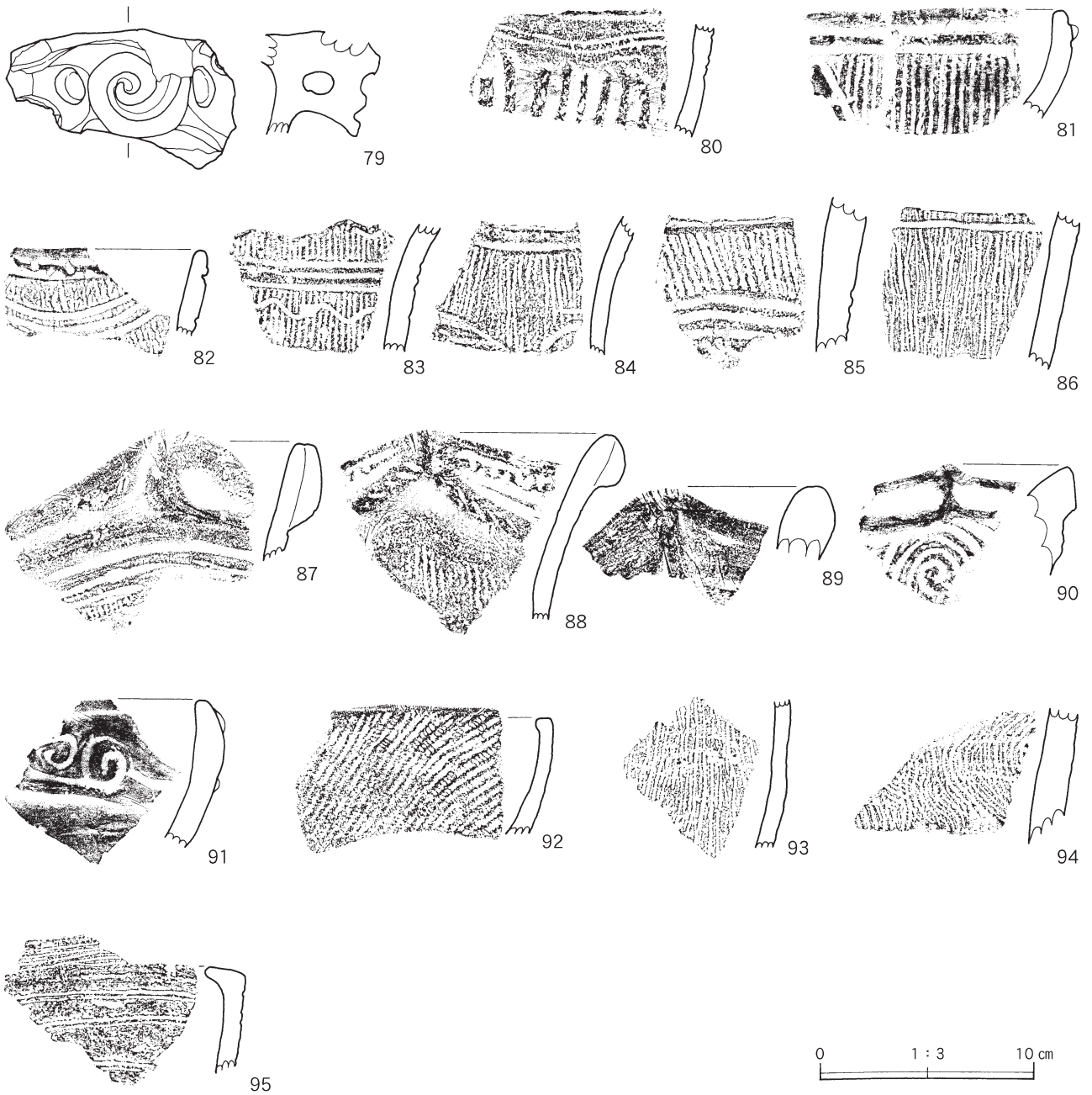
第115図 10・13号住居跡出土遺物（1）



第116図 10・13号住居跡出土遺物(2)



第117図 10・13号住居跡出土遺物（3）



第118図 10・13号住居跡出土遺物（4）

れの深さはP1-17.7cm、P2-27.8cm、P3-31.4cm、P4-29.7cm、P5-20.7cm、P6-28.9cm、P7-29.1cm、P8-55.1cm、P9-12.7cm、P10-21.1cm、P11-12.7cm、P12-74.2cmである。

住居跡の帰属時期は出土した遺物から、加曾利B I 式期に属すると考えられる。

第24表 11号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	26.0	17.7	P5	28.0	20.7	P9	27.0	12.7	P13	22.0	21.5	P17	34.0	51.6
P2	26.0	27.8	P6	33.0	28.9	P10	21.0	21.1	P14	25.0	22.8	P18	36.0	39.4
P3	19.0	31.4	P7	30.0	29.1	P11	20.0	12.7	P15	24.0	12.7	P19	28.0	33.4
P4	22.0	29.7	P8	34.0	56.5	P12	67.0	74.2	P16	28.0	10.6			

11号住居跡出土土器（第121～123図）

1は精製の深鉢形土器である。底部で外反し、胴部からはわずかに内湾しながら立ち上がり、口唇部でやや肥厚して端部は尖鋭する。口唇部には刻みが施され、小突起が3単位付けられる。突起からは短隆帯が垂下し、これが短沈線に変化して縄文帯を繋ぐ。縄文帯は平行沈線と磨り消されたLRの単節縄文によって構成され2段に描く。胴部は無文であり、内部の口唇部直下に沈線が1条廻る。土器の口径は18.8cmで、高さは23.0cmである。胎土には細礫が多く含まれる。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2は精製の浅鉢形土器である。胴部はわずかに内湾し、口唇部で内屈して刻みを施す。文様は内面文で外面は無文である。内側の口唇直下には刺突列が廻る。このうち、いくつかは貫通して外面に達している。刺突列下には刻みのある隆帯が2条廻る。胴部上半には縄文帯が3段とそれを挟み込むように平行する沈線が3条廻る。縄文帯は縦位の蛇行状沈線で繋ぐ。また縄文帯自体が沈線と入り組み状に変化して結節する。土器の復元口径は36.0cm、現存高は9.5cmである。胎土には砂粒が含まれる。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

3は精製の深鉢形土器で、3単位の波状口縁を呈する。胴部は直線的で口縁部は内湾し、口唇端は先鋭する。口唇直下には沈線と刻みのある隆帯が口縁に沿って波状に描かれる。波頂では刻みのある短隆帯が垂下し、胴部で結節して3段の縄文帯が廻る。1段目は地文がほとんど磨り消される。縄文帯は縦位の短沈線と「の」字状の沈線で繋がっている。土器の内面にも口唇下に浅い沈線を波状に施す。土器の復元口径は16.5cm、現存高は16.0cmである。胎土には砂粒が含まれる。色調は内外面とも暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

4は小型の鉢形土器である。平口縁で底部からは大きく内湾する器形である。底面に網代痕を有する。口唇部は内屈する。文様は表面に4条の平行沈線を描き、丸い刺突を沈線間に縦位に並べて施す。復元口径は11.2cmで高さは6.5cmである。胎土は砂粒が含まれる。色調は内外面ともに茶褐色で、焼成は良好である。

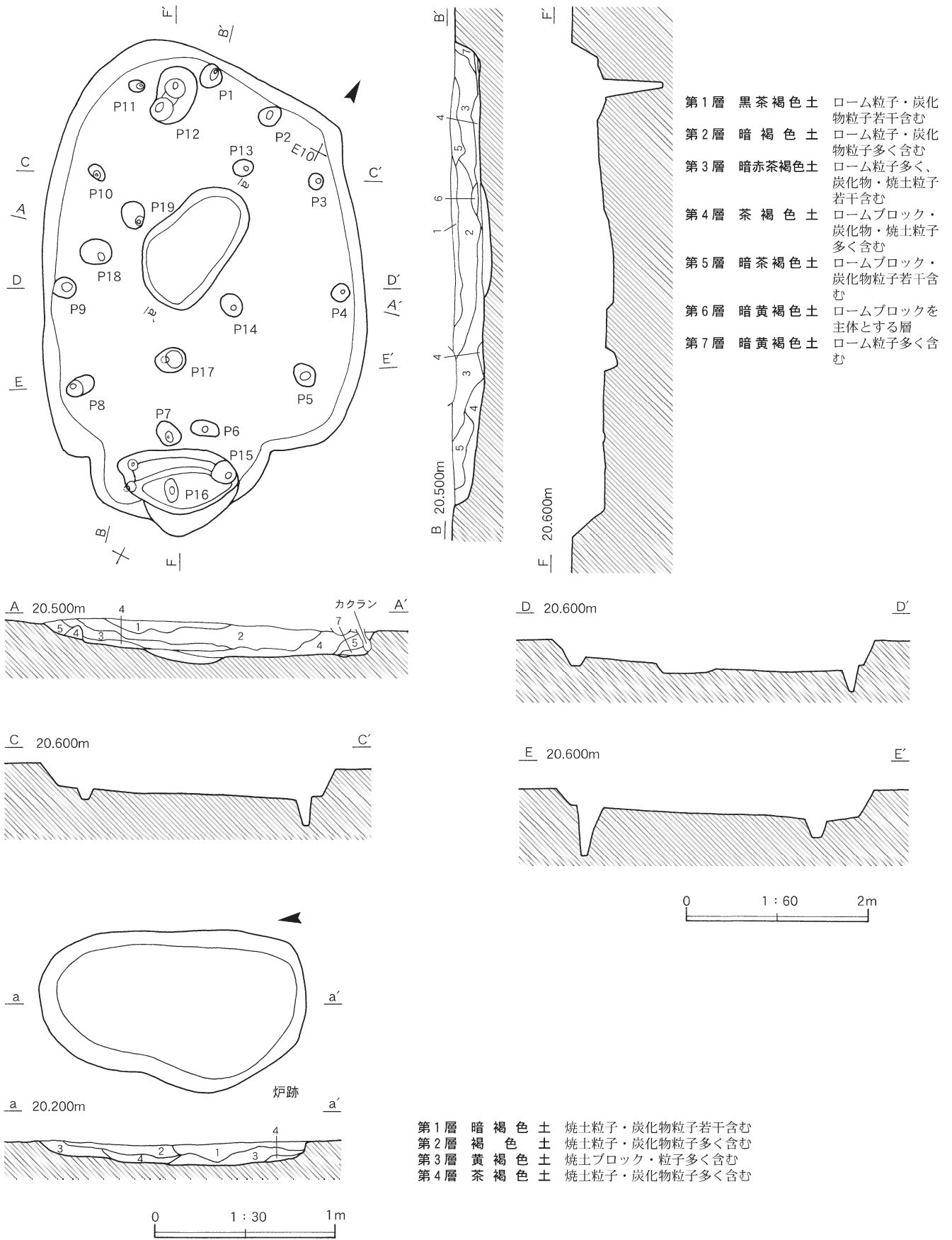
5は加曾利BⅡ式の粗製深鉢形土器である。上下に対向する弧線文を描き、沈線間は磨り消しにより縄文帯とする。立ち上がりは直線的で、復元した最大径は24.3cmである。

6は波状口縁を呈する深鉢形土器である。波頂部と波底部に隆帯を施す。口唇部直下には幅広の縄文帯が横走する。地文はLRの単節縄文を磨り消す。内面にも口縁に沿って沈線が廻る。

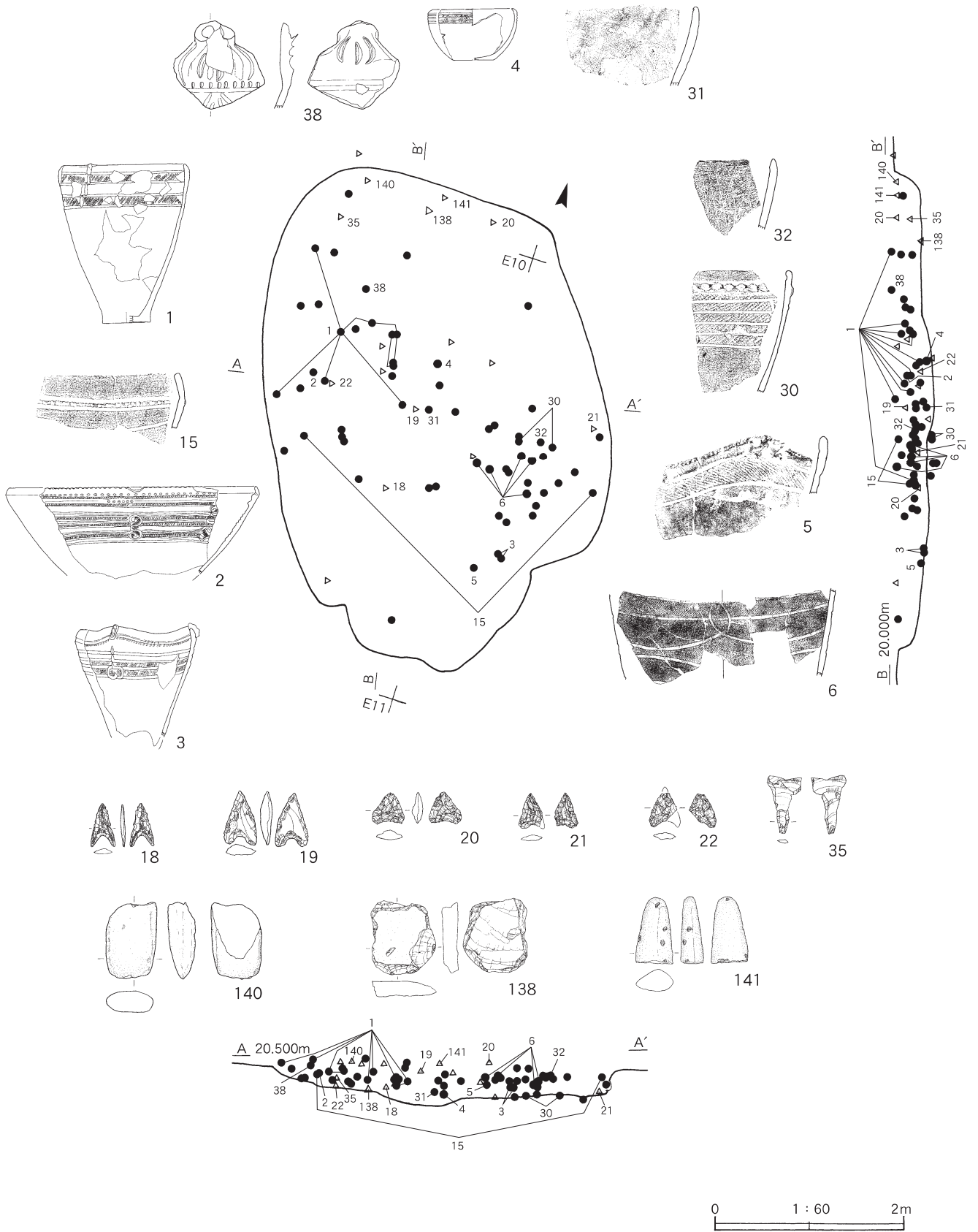
7は小型の深鉢形土器である。波状口縁で波頂部に小突起を有する。口唇部直下には貫通孔を施し、縄文帯を複数列描く。

8～10は深鉢形土器の口縁部で平口縁である。外面の文様は縄文帯が横走する。8は内面に沈線が廻る。

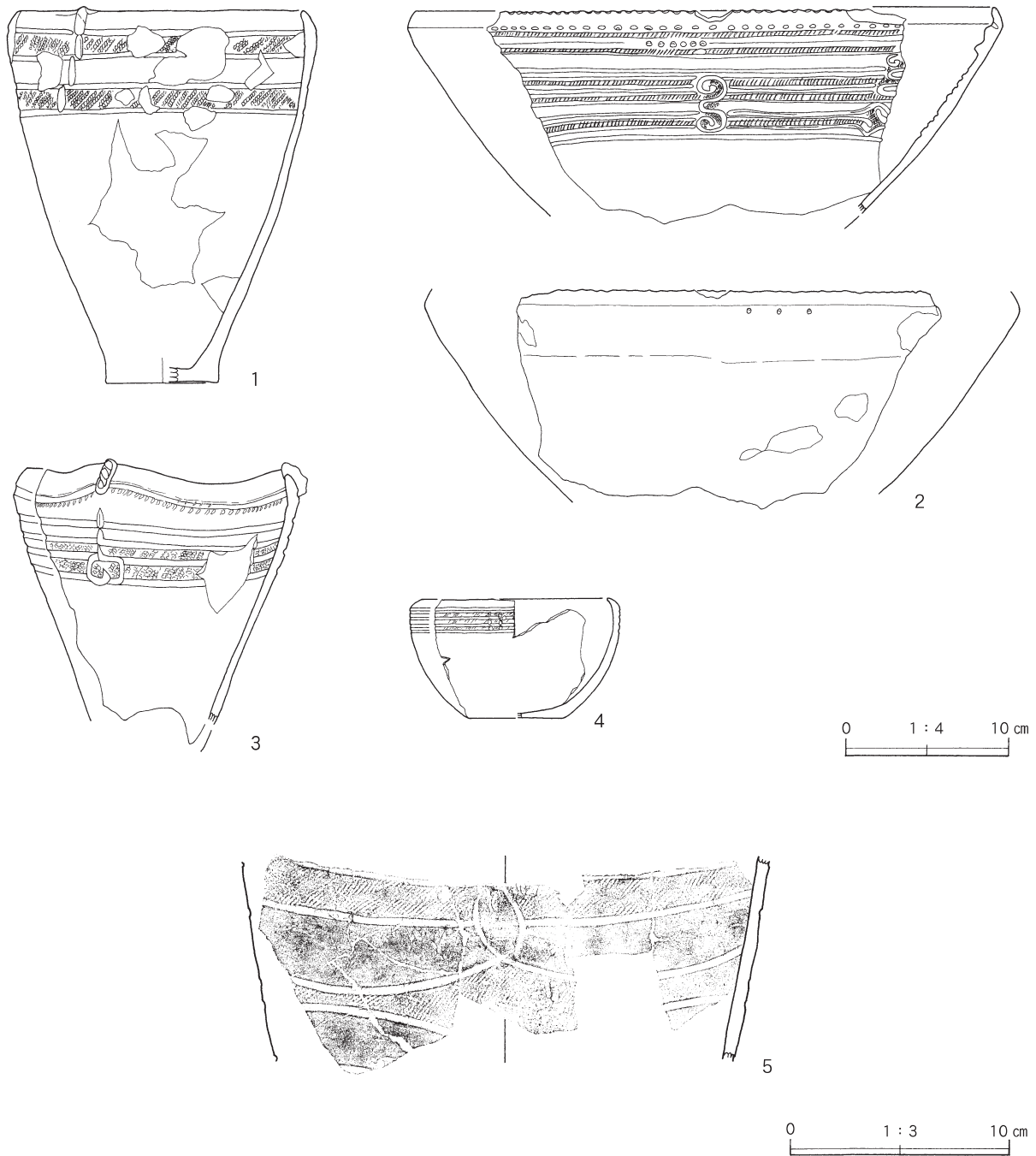
11～14は鉢形土器である。11、12は口唇部直下から複数条の沈線が横走する。12は最上部に刻みを加え、他は沈線が縄文を磨り消している。13は刻みのある隆帯、縄文を施す隆帯、横走する沈線により上下2段の文様帯を構成する。14は上下2段の縄文帯を縦位の沈線文が繋ぐ。縄文帯は磨り消しにより描かれる。



第119図 11号住居跡



第120図 11号住居跡遺物出土状況



第121図 11号住居跡出土遺物（1）

15～18は浅鉢形土器である。いずれも口縁部で内屈する器形である。15～17は押圧を加えた隆帯が屈曲部に廻る。18は口唇部に刻みを施す。

19～21は深鉢形土器の胴部片である。いずれも複数条の沈線間に磨り消し縄文を施す。

22～25は深鉢形土器の底部片を一括した。底面にはいずれも網代痕が残される。

26～28は浅鉢形土器である。いずれも内外面に文様帯を有する。26は口唇部に粗い刻みが施される。内面の屈曲部には刺突文が廻る。27は外面の文様帯をクランク状の沈線が繋ぐ。28は外面の文様帯が2段の構成である。29、30は浅鉢形土器の底部片である。底面に網代痕が認められる。

31～38は粗製土器である。31は深鉢形土器で口唇直下に紐線文が廻り、胴部には5段の縄文帯を施す。32は補修孔が外から内へ穿たれる。胴部には2本一組の沈線が斜状に交差し、山形の文様を描く。33は浅い沈線による格子目のモチーフである。34はLRの単節縄文による撚糸文を縦位に転がす。35は複数条の沈線が横走する。36は縄文帯を縦位のクランク状沈線が繋いでいる。37、38は深鉢形土器で、単節縄文による地文を施す。

39、40は加曾利BⅡ式の土器である。39は深鉢形土器の突起部で表裏に対向する弧線文を描き、端部は「の」字状の隆帯を施す。40は胴部に弧線文を描く。

41～44は勝坂Ⅲ式の土器である。41は山形の突起部を施す。口縁部直下には爪形文を地文とし、円形の隆帯を貼付する。42も山形状の突起部で、正面はやや左にねじれる。裏面は三叉文を描く。43は半裁竹管による集合沈線と斜行隆帯が施される。44は粗く刻みを入れた隆帯による平行懸垂文である。

45は中峠系の土器で渦巻文が外側に突出する。46、47は加曾利E式の深鉢形土器の口縁部片である。地文上に隆帯による文様を施す。48は連弧文土器の口縁部片である。口唇部直下に交互刺突文が廻る。

12号住居跡（第124・125図、第25表）

住居跡は、E10グリッド付近に位置する。住居跡の南東部は調査区外で、北東部を11号住居跡に壊される。平面形は南北にやや長い楕円形であろう。調査された範囲では、現存長3.3m、深さ0.45mの規模である。主軸はN-1°-Wを指向する。床面は中央に向かってわずかに傾斜し、壁面は緩やかに立ち上がる。壁溝は床面の北東部分で検出され全周しない。

覆土は焼土粒子、炭化物粒子、ロームブロックを多く含む暗茶褐色土を主体とする。遺物は覆土中から多く出土し、住居の廃絶後に土器の廃棄場となった様相を示す。

炉跡は3基確認されており、すべて地床炉である。1号炉は南西部が調査区域外に位置し、長径130cm、調査できた範囲で短径68cm、深さ34cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は椀状である。主軸はN-20°-Wを指向し、覆土は焼土ブロックを多く含む明褐色土を主体とする。2号炉は床面の中央やや南東寄りに所在し、平面形は円形を呈する。南西部は調査区域外に位置し、調査範囲で長径48cm、短径40cm、深さ18cmを測る。断面は椀形で、主軸はN-27°-Wを指向し、覆土は焼土ブロックを多く含む明褐色土を主体とする。3号炉は床面の中央やや北寄りに位置し、平面形は円形を呈する。長径60cm、短径52cm、深さ18cmを測り、断面形は椀状である。主軸はN-33°-Wを指向し、覆土は焼土ブロックを多く含む明褐色土が主体である。

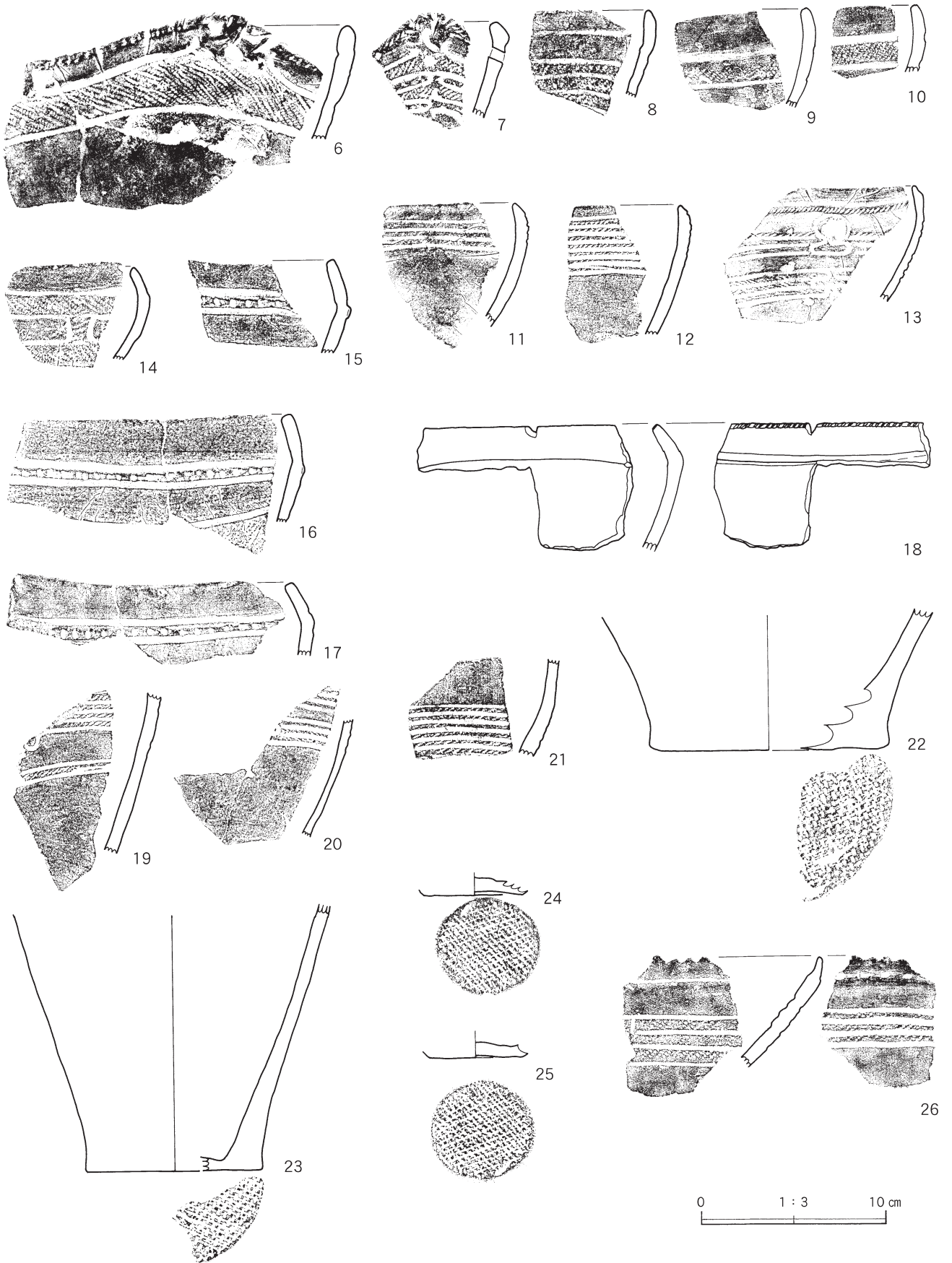
ピットは床面から7基が検出され、このうちP1～P4が支柱穴になると想定される。それぞれの深さはP1-56.5cm、P2-50.6cm、P3-62.3cm、P4-32.0cmである。

出土した土器は加曾利EI式期が主体であり、住居跡の帰属もこの時期に相当すると考えられる。

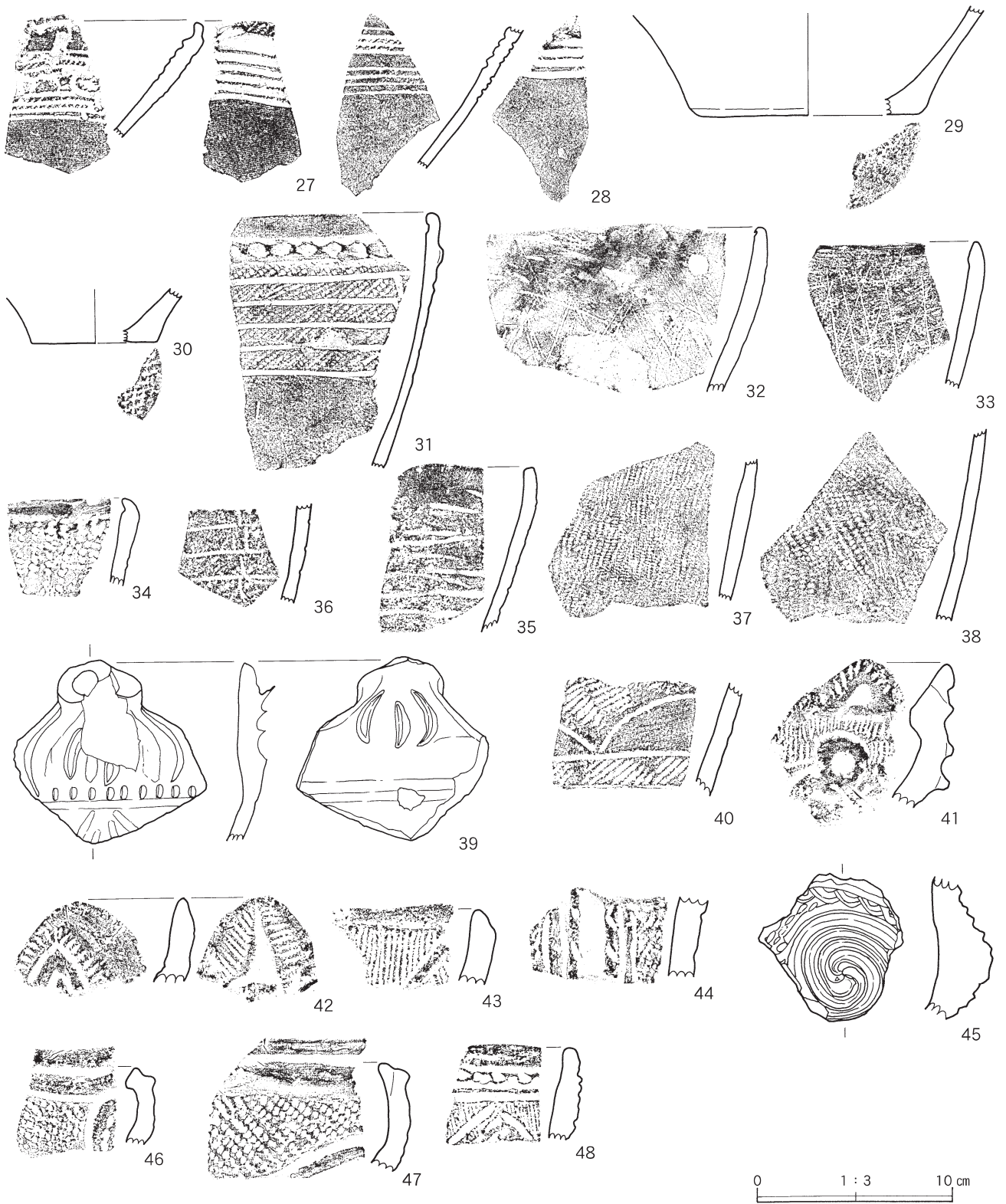
第25表 12号住居跡柱穴計測表

(単位:cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	38.0	56.5	P4	32.0	8.7	P7	37.0	44.3
P2	40.0	50.6	P5	26.0	53.5			
P3	36.0	62.3	P6	56.0	72.0			



第122図 11号住居跡出土遺物(2)



第123図 11号住居跡出土遺物（3）

12号住居跡出土土器（第126～129図）

1から6は突起部である。1は口縁部に配される突起部で、正面の3か所の欠損部には橋状の隆帯が貼付されていたと想定される。半円形の窪み部には対向する弧線文を描き、両脇には渦巻文と弧状の隆帯に3本の沈線を施す。2は胴部の眼鏡状突起で、両側縁から貫通孔を施す。3は波状口縁を呈する。波頂部から刻みを有する隆帯が垂下し、これを挟んで左右は非対称である。4は半円状の突起で中央部が窪む。周縁にはわずかに刻みを施す。5は波状を呈する口縁部で、口唇部から縦位の橋状突起が派生する。内面は庇状に隆帯が突出する。6は山形状の突起で、隆帯が側縁に沿って貼付される。

7は爪形文によるモチーフが主文様となる。三叉文と円孔を中心に同心円文が描かれる。8は波状で爪形文を刻む隆帯を胴部の屈曲部に貼付する。小型の浅鉢形土器であろう。

9～12は円筒形に直立する器形の深鉢形土器である。9、10は口唇部直下から縦位の文様帯が展開する。11は地文上に爪形文を刻む逆U字状の隆帯を貼付する。12は口縁部に広い無文帯を有し、一部に弧状の沈線を描く。

13は波状口縁を呈する。口唇部直下には交互刺突文が廻り、縄文を施す隆帯と刻みを有する隆帯がこれに平行する。

14～18は隆帯によるモチーフが主文様となる。14は区画文内に弧状の文様を充填する。15は矢羽状のモチーフを垂下させる。16、17は矩形の区画文である。18は半肉彫状に文様を描く。

19は2本の沈線が垂下し、沈線を挟んで楕円形の文様を対向して描く。20は楕円形横帯文の一部である。

21～24は弧形のモチーフを描く一群である。21は斜行あるいは水平の隆帯が弧状の隆帯に変化し、やや突起状となる。22は隆帯と沈線により渦巻文を描く。23は逆U字状の隆帯間に三叉文の一部と思われる文様が充填される。24は角押文を隆帯に沿って施す。

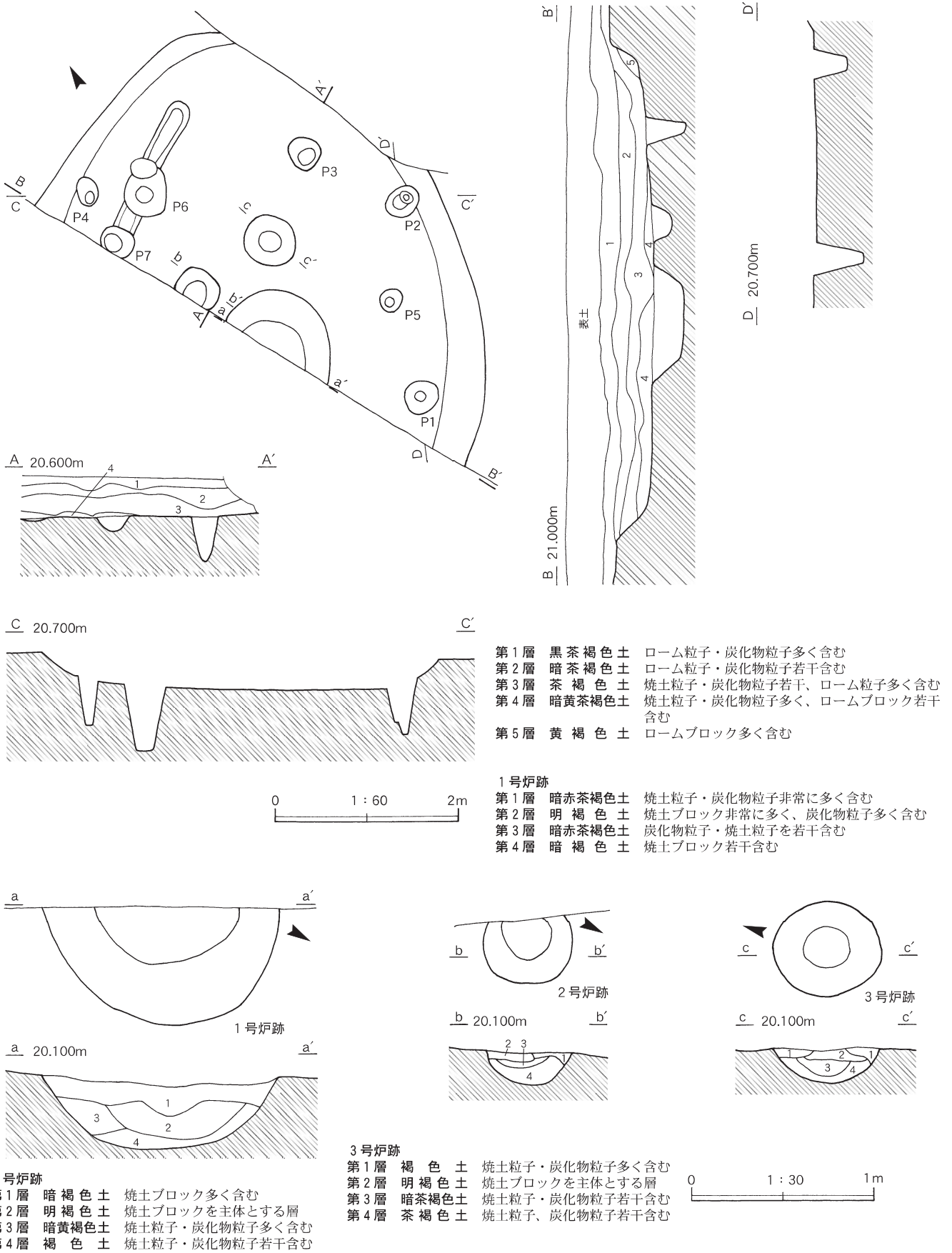
25、26は蓮華文を描く。25は円形で、26は縦位に連続して施す。

27は胴部の屈曲部に押圧を連続した隆帯が廻る。28は蛇行する隆帯が区画文を構成し、集合沈線を充填する。29は隆帯上に交互刺突文を施す。30は口縁部の屈曲部に交互刺突文が廻り、刻みのある隆帯が平行する。31は刻みのある隆帯から集合沈線が垂下する。

32、33は阿玉台Ⅱ式の土器である。32は扇状の突起部で端部はU字状に窪む。口唇部から垂下する隆帯に沿って角押文を施す。33は突起部が欠失する。懸垂文は刻みを伴い、垂下してJ字状となる。2本の有節沈線を弧状に施す。34は阿玉台Ⅲ式の口縁部片である。爪形文が沿う楕円形区画文内に鋸歯状の沈線を施す。35は口唇部の側縁に刻みを施し、内部に三角押文を描く。36、37は平縁で口唇直下に角押文、三角押文を施す。阿玉台Ⅱ式である。38は三角形断面の隆帯に沿って沈線を施す。

39は貫通孔を有する突起で、両側縁に円形の隆帯を付し、中心に円孔を施す。40は中峠系の土器で、波状口縁を呈し、太い隆帯で突起状に外側へ突出する。41は口縁部文様帯に橋状の突起を貼付させる。

42～56はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部である。42は繋ぎ弧文の結節点突出し、左側縁に渦巻文を描く。43は口唇部に沈線が廻る。縦位の隆帯が方形の区画文を構成し、突起状の渦巻文を貼付する。44は波状口縁を呈する。2本の波状隆帯の結節点に渦巻文を配する。45は口唇部に小突起を配する。2本隆帯の渦巻文に水平方向の隆帯が派生し、隣の渦巻文と結節する。46は弧状の文様が対向し、一方の端部は渦巻文となる。47は2本隆帯が横S字状文を描く。地文は横位の撚糸文である。48は口唇部に突起が付くと考えられる。口唇直下から派生した縦位の隆帯が、横走する隆帯に沿って渦巻文を構成する。49は口唇部の小突起に渦巻文を配する。50は地文がなく、細長い楕円形の隆帯が円形の貼付文と結節する。中峠系であろう。51は隆帯による渦巻文から斜状に2本の隆帯が派生する。52は波状口縁で、口唇部の小突起には円孔を配す



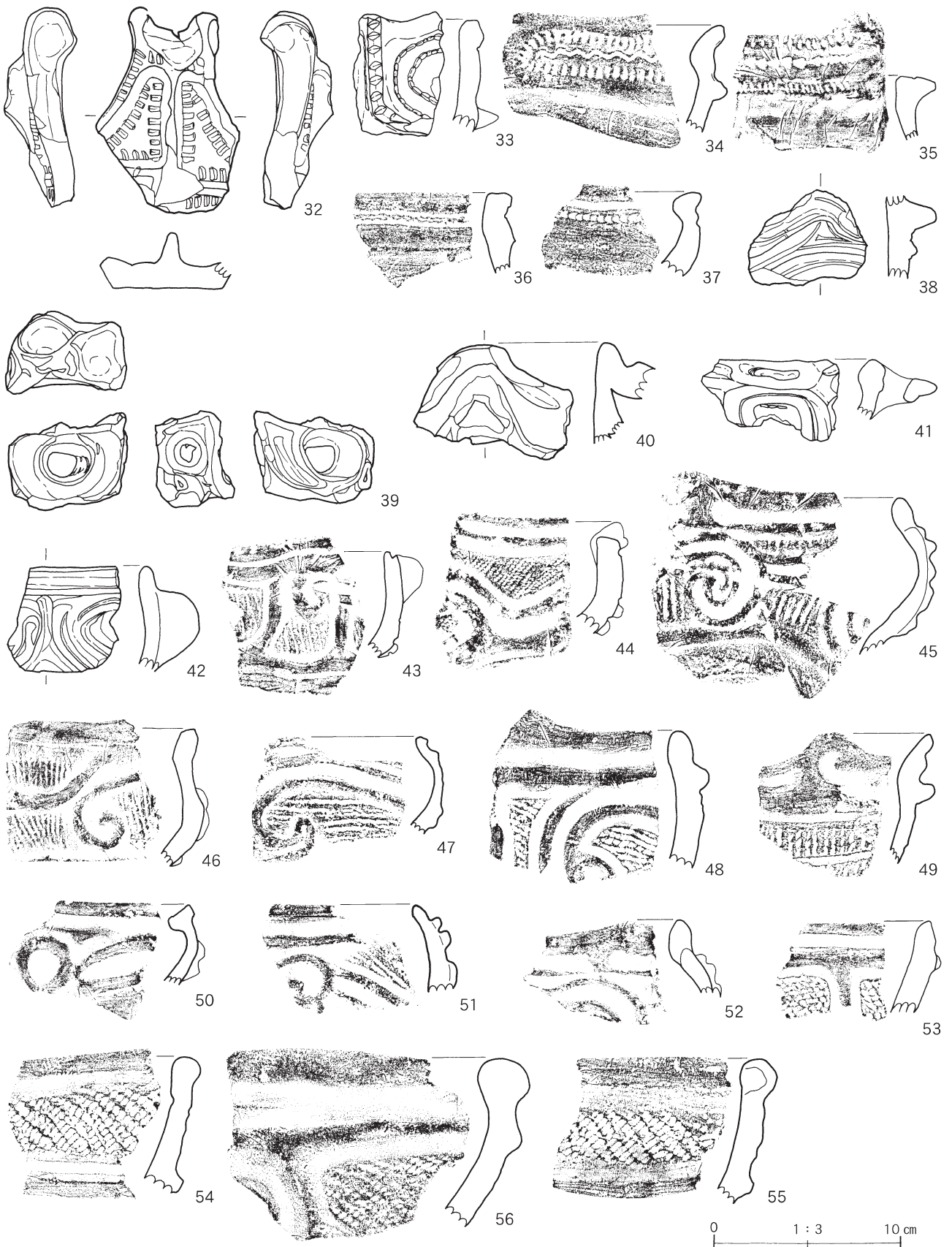
第124図 12号住居跡



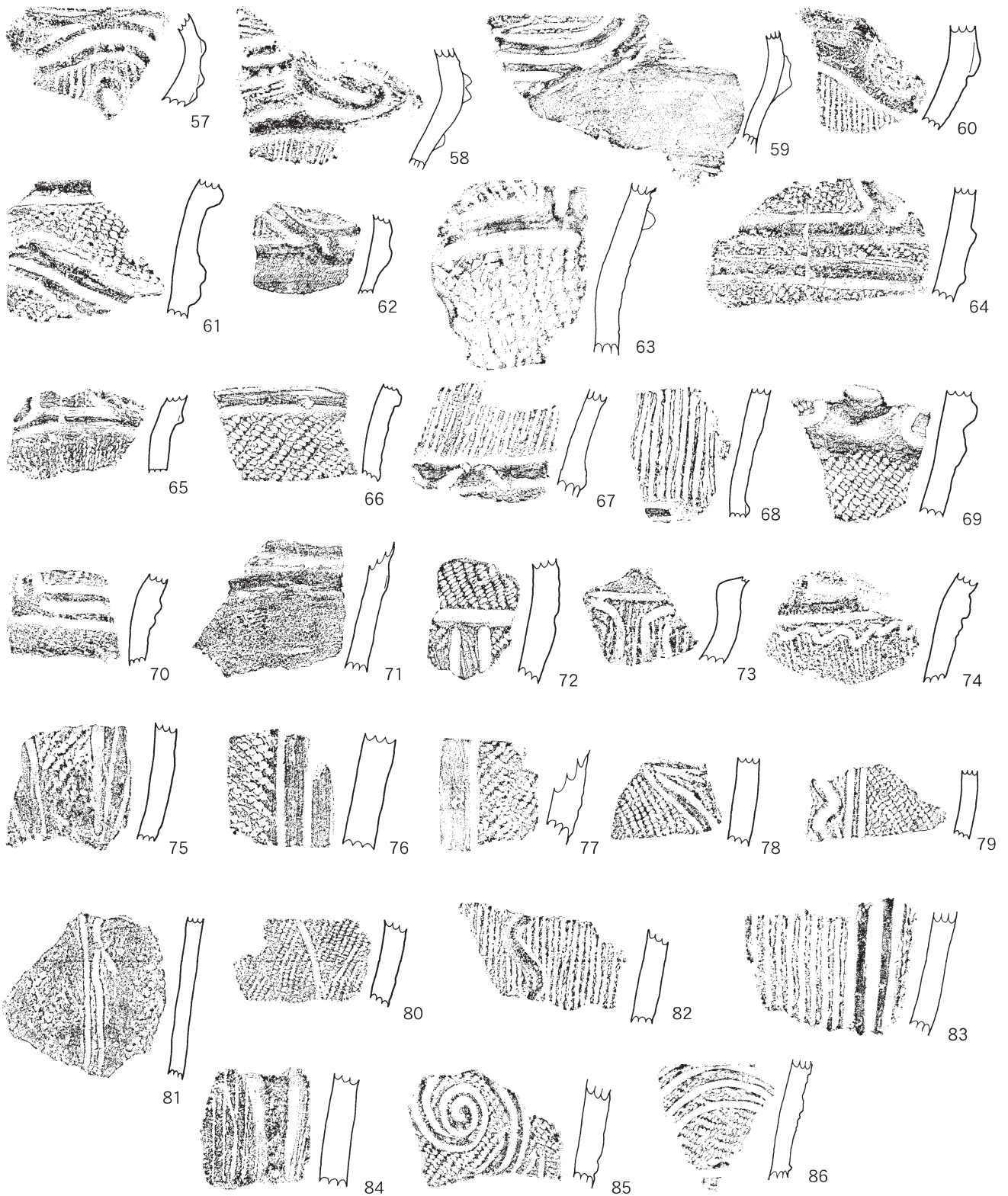
第125図 12号住居跡遺物出土状況



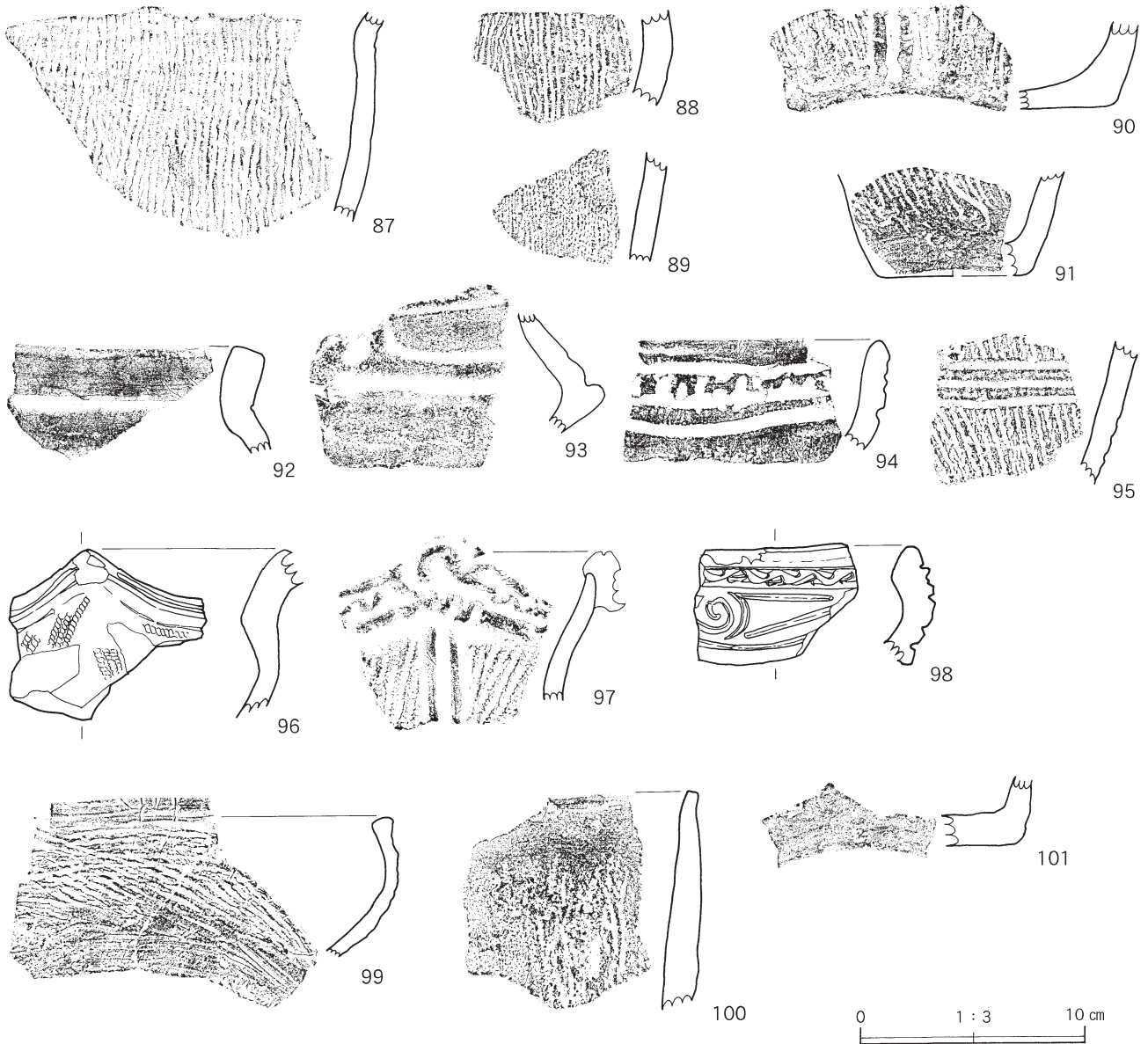
第126図 12号住居跡出土遺物（1）



第127図 12号住居跡出土遺物(2)



第128図 12号住居跡出土遺物（3）



第129図 12号住居跡出土遺物（4）

る。53は隆帯による方形の区画文を描く。54、55は同一個体と思われ、隆帯の裾部に幅の広い磨り消しが認められる。56は口唇部直下に幅広い沈線状の無文帯を配する。

57～72は深鉢形土器の口縁部から頸部の破片である。57は横S字状の文様で、地文は縦位の燃糸文である。58は平行する隆帯が屈曲し、弧状に変化するモチーフである。59は口縁部文様帯が弧状の区画文で、広い頸部の一部が口縁部に貫入する。60は隆帯が分岐して渦巻文を構成するものであろう。61は2本の隆帯が斜状に横走する。62は斜行する隆帯が頸部との結節点に円孔を施す。63は口縁部区画文に集合沈線を充填し、頸部にはRLの単節縄文を施す。64は頸部との区画に隆帯間を広く開けて地文を残している。65は口縁部と頸部の地文を一連で施す。66は頸部の地文をRLの単節縄文で施す。67は口縁部と頸部を区画する隆帯に「ハ」字状の刻みを施す。68は口縁部文様帯の地文が縦位の燃糸文である。69は頸部を区画する隆帯にも地文が施されている。70は縦位、横位とものに2本隆帯で区画文を描く。71は広い頸部無文帯である。

72～86は深鉢形土器の胴部片である。72は区画する沈線から平行する懸垂文が垂下する。73は弧状の沈線文が垂下する。74は頸部直下に沈線による小波状文を描く。75～77は懸垂文間の地文が磨り消される。78は

蛇行懸垂文が平行沈線で描かれる。79は懸垂文を蛇行沈線に沿って描く。80は大きく蛇行する懸垂文である。81は地文を粗く施し、平行する2本の沈線による懸垂文を描く。82は蛇行隆帯を貼付する。83は隆帯による懸垂文である。84の地文は集合沈線で、この地文上に太い隆帯が垂下する。85は懸垂文から派生する半肉彫状の渦巻文である。86は胴部に大柄の渦巻文を描く。

87～89は深鉢形土器の胴部片で、燃糸文を地文とする。90、91は底部片である。91は底部直上を磨り消して無文帯とする。

92は無文の浅鉢形土器である。口縁部が矩形に肥厚し、わずかに外反して立ち上がる。93は浅鉢形土器の屈曲部で、隆帯による区画文を描く。94、95は連弧文土器の一部である。94は口唇部直下に交互刺突文が廻る。95は胴部の文様帯を3条の平行沈線で上下に分離する。

96～98は中峠系の土器である。96、97は波状口縁を呈する。96は波頂部から派生する沈線が口唇部に施される。97は波頂部から懸垂文が垂下し、口唇部には交互刺突文を配する。98は平口縁で、口唇部直下には交互刺突文が廻り、沈線により渦巻文と区画文を描く。

99、100は口縁部にわずかな折り返しが認められる。99は浅鉢形土器で上半部に横位の燃糸文を施文し、斜位に変換して上書きする。胴部下半は粗い削りで成形する。100は深鉢形土器で、口唇部直下に無文帯を設け、胴部は地文のみを施す。いずれも加曾利EⅢ式に比定される。101は底部である。

14号住居跡（第130図、第26表）

住居跡は、H9グリッドに位置する。住居跡の北東部は調査区域外に所在する。10・13号住居跡を切り、15号住居跡に切られている。平面形はやや長い楕円形を呈すると思われる。調査範囲で、長径は4.7m、短径1.8m、深さ0.3mを測る。主軸はN-25°-Wを指向する。床面はほぼ平らで、壁面は緩やかに立ち上がり、壁溝を伴わない。覆土は大きく3層に分かれ、ロームブロック、焼土粒子を含む黄茶褐色土を主体とする。遺物の出土は多くない。

炉跡は調査範囲で検出されなかった。ピットは床面から4基が検出されており、P1～P3が支柱穴である。それぞれの深さはP1-45.8cm、P2-60.1cm、P3-77.1cmである。

出土した土器は加曾利EⅠ式期が主体であり、住居跡の帰属もこの時期に比定される。

第26表 14号住居跡柱穴計測表 (単位cm)

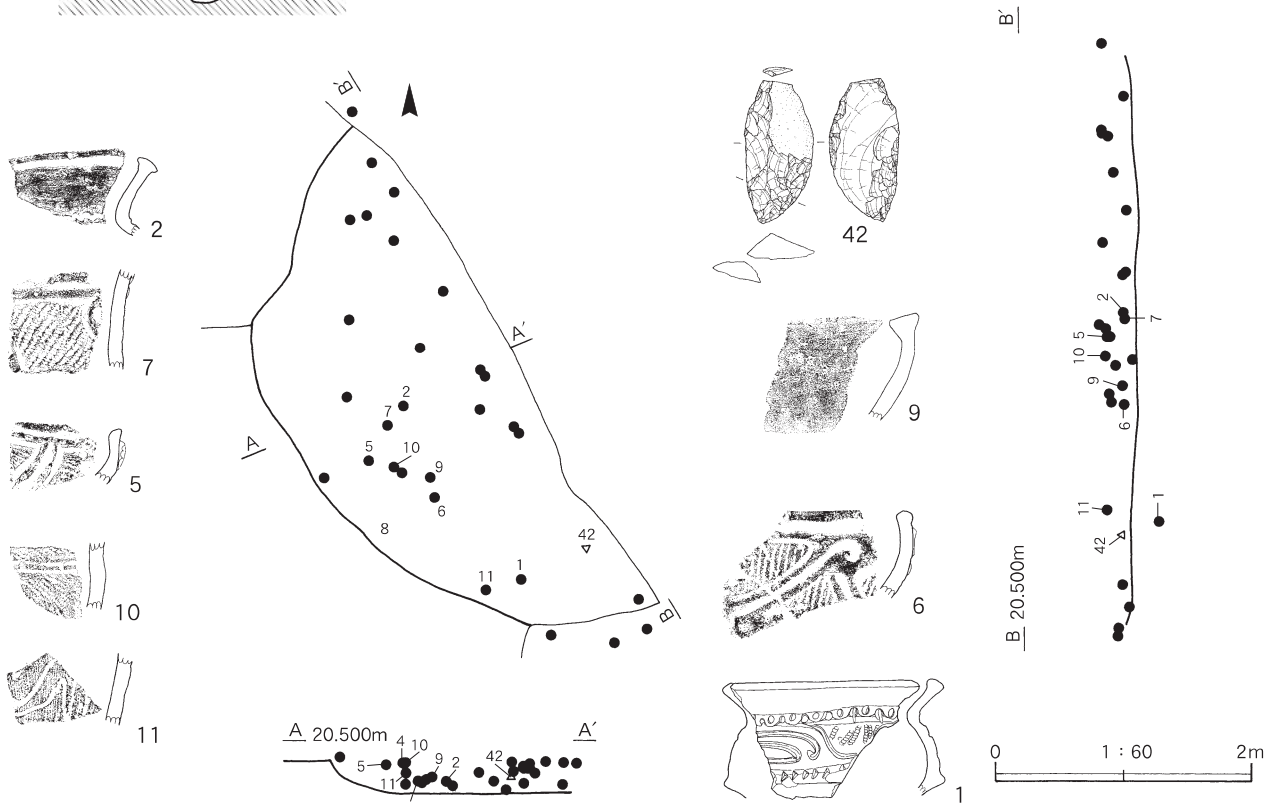
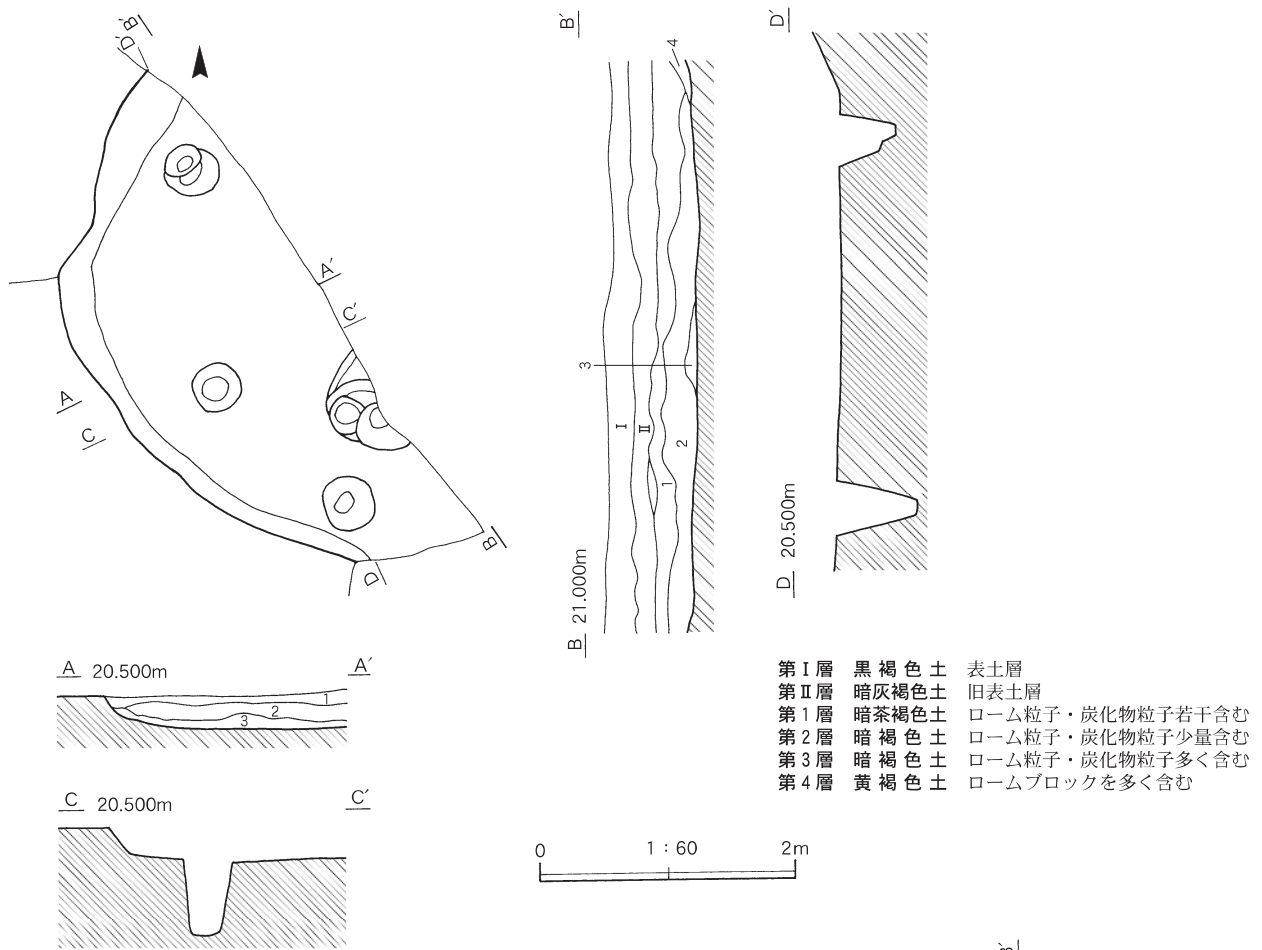
	長径	深さ		長径	深さ
P1	43.0	45.8	P3	43.0	77.1
P2	36.0	60.1	P4	86.0	52.4

14号住居跡出土土器（第131図）

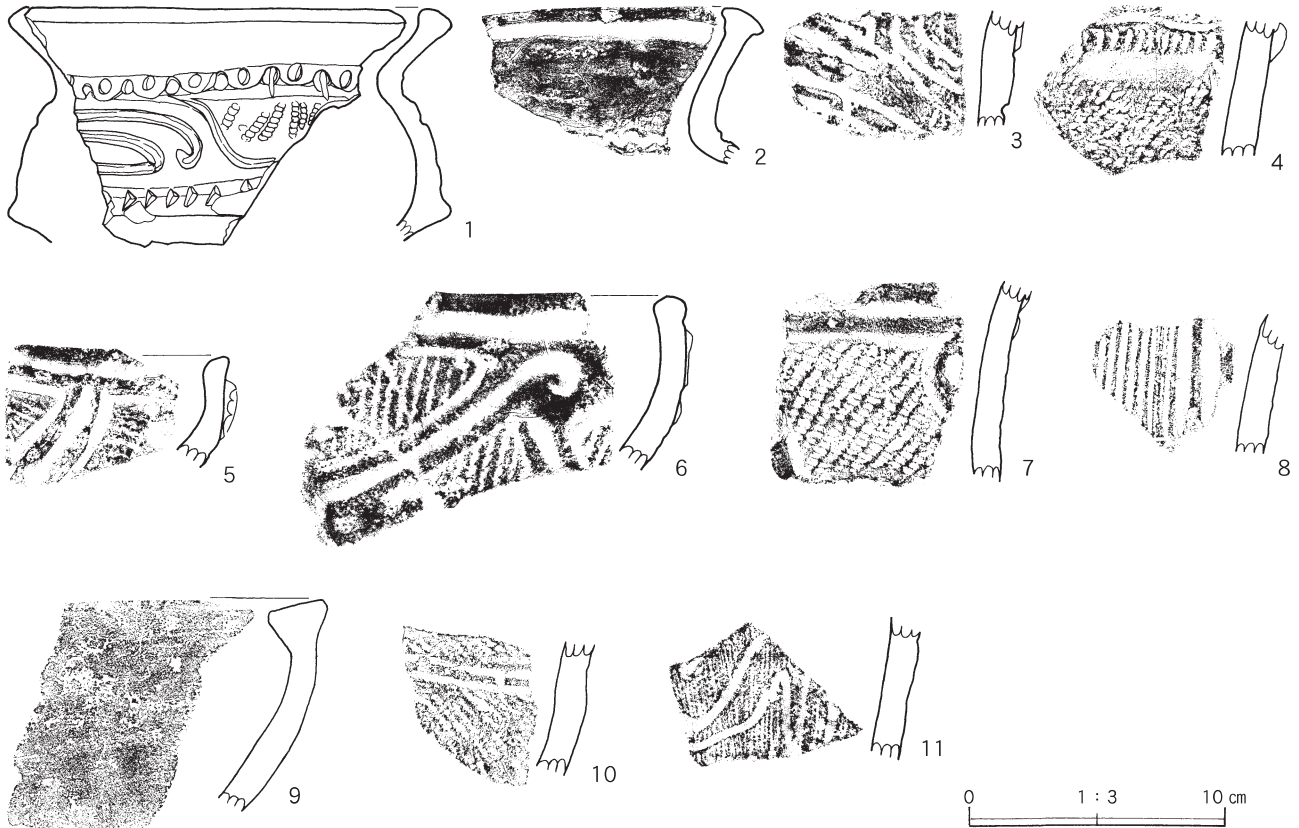
1は浅鉢形土器である。胴部から頸部で強く屈曲し、頸部は内湾しながら移行して口縁部で再び強く外反する。口唇部は肥厚する。口縁の屈曲部には隆帯上に交互の押圧が施されて廻る。頸部には単節LRの縄文を地文として2本の隆帯がクランク状に変化し、胴部隆帯との結節点に小渦巻状の剣先文が施される。胴部との境は三角押文が横位に廻る。復元口径は16cm、現存高は9.3cmである。2も同様に浅鉢形を呈すると想定される。口縁の屈曲部には小波状の沈線文が廻る。

3、4は勝坂Ⅲ式の土器である。3は斜状の隆帯による区画文内を沈線文が充填される。4は横位の刻みを有する隆帯が廻る深鉢形土器である。

5、6はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部片である。5は2本隆帯が斜状に垂下し、地文が隆帯



第130図 14号住居跡・同遺物出土状況



第131図 14号住居跡出土遺物

に沿って磨り消される。6は2本隆帯が弧状に横走り、端部に渦巻文を貼付する繋ぎ弧文である。

7、8は胴部片である。7は蛇行隆帯による懸垂文が平行して施される。8は地文が縦位の条線である。

9は無文の浅鉢形土器である。大きく内湾しながら立ち上がり、口唇部が肥厚する。

10、11は連弧文土器の胴部片である。10は平行する沈線を施す。11は弧状の平行沈線が縦位に変化する。

15号住居跡（第132・133図、第27表）

住居跡はH10グリッドに位置する。第1次調査で検出された9号住居跡と同一の住居で、北西部の4分の1について調査を行った。東半部は調査区外である。住居跡は北側の14号住居の一部を切り、東側を75号土坑に壊される。平面形は長楕円形を呈し、第1次調査の成果を加えると長径は5.3m、短径は調査範囲で2.8m、深さ0.4mの規模である。

床面はほぼ平らで、壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は検出しなかった。主軸はN-35°-Wを指向する。

覆土はローム粒子、炭化物粒子を含む暗茶褐色土を主体に堆積する。遺物は覆土の各層から出土し、住居廃絶後に土器の廃棄が行われた結果と想定される。

炉跡は地床炉で、床面の中央やや西寄りに確認された。炉跡上には意図的な土器の廃棄行為が認められた。炉跡の平面形は楕円形で、長径122cm、短径68cm、深さ20cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がる。覆土

第27表 15号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	93.0	66.4	P3	44.0	76.7	P5	55.0	66.6
P2	53.0	81.5	P4	48.0	33.6	P6	54.0	23.4

は焼土粒子、炭化物粒子を含む茶褐色土が主体的に堆積する。主軸はN-18°-Eを指向する。

ピットは第1次調査を含めて6基が検出され、このうちP1~P5が主柱穴になると想定される。それぞれのピットの深さはP1-66.4cm、P2-81.5cm、P3-76.7cm、P4-33.6cm、P5-66.6cmである。

炉跡、床面直上から出土した遺物から、住居跡の帰属時期は加曾利EⅡ式期と考えられる。

15号住居跡出土土器（第134~138図）

1はキャリパー形の深鉢形土器である。炉跡上の細片の接合により復元された。底部から内湾するように立ち上がり、胴部中央で括れて外反し、頸部でやや内屈して直線状に口縁部へ達する器形である。口縁部の主文様は渦巻文とこれを繋いで斜行する2本隆帯である。隆帯は断面が矩形で角を強調して貼付する。これを横位に5単位廻らせたと考えられる。胴部は無節1の撚糸文を縦位に施す。平行する2条の沈線と蛇行沈線を頸部からやや間隔をおいて交互に垂下文として描く。土器の口径は30.5cm、現存高は32.0cmである。胎土には片岩の細礫を多く含む。色調は内外面ともに茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2は曾利系の深鉢形土器である。底部から直線的に立ち上がり、胴部上半でわずかに内湾する。頸部で外反し、口縁部で再び内湾して口唇部に至る。器面全体に単節縄文を施すが、口縁部上半はRL、下半はLRに分けて施文する。口唇直下には交互刺突文が廻る。口縁部文様帯は2条の平行する沈線が波状して横位に廻る。頸部の屈曲部には平行する2条の沈線が施され、ここから蛇行沈線と平行沈線の懸垂文が描かれる。また、胴部下半には懸垂文を受けとめる形で2条の沈線を廻らす。復元口径は39.0cm、現存高は47.0cmで、胎土には片岩の細礫を多く含む。色調は内外面ともに茶褐色で、焼成は良好である。

3~5はいずれも無文の浅鉢形土器である。3は底部から直線的に立ち上がり、口縁部で強く内湾する器形である。外面はよく磨かれて滑沢を帯びる。復元口径は23.5cm、現存高は11.0cmである。胎土には細礫が多く含まれる。色調は外面が茶褐色、内面は明茶褐色で、焼成は良好である。4は底部直上に稜をもち、わずかに外反しながら立ち上がり、口縁部で強く内側に屈曲する。復元口径は29.0cm、現存高は8.5cmである。胎土には片岩の細礫を多く含む。色調は内外面ともに茶褐色で、焼成は良好である。5は胴部上半が最大径となり、内湾する。口縁部は外反して矩形に肥厚する。復元口径は39.0cm、現存高は12.5cmである。胎土には細礫を多く含む。色調は内外面ともに暗茶褐色で、焼成は良好である。

6~10は勝坂式土器の口縁部片である。6は波状口縁の突起部である。横位の沈線文を口縁の波状に沿って施す。7は口縁部に広い無文帯を有する。頸部との区画は刻みをもつ隆帯が横走する。8は円形の突起を口唇部に配する。口縁部文様帯は弧状の隆帯により区画され、内部は細い角押文が充填される。9、10も波状口縁を呈する。9は波頂部から弧状の隆帯が垂下する。10は短沈線を交互に施した隆帯で区画文を描く。

11は円状の隆帯を貼付する。12は横帯区画文の一部で、楕円形を呈するであろう。13、14は円筒形を呈する深鉢形土器で、縦位の隆帯による区画文内に弧状の沈線文を充填する。

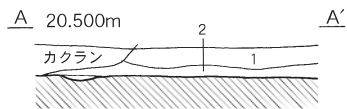
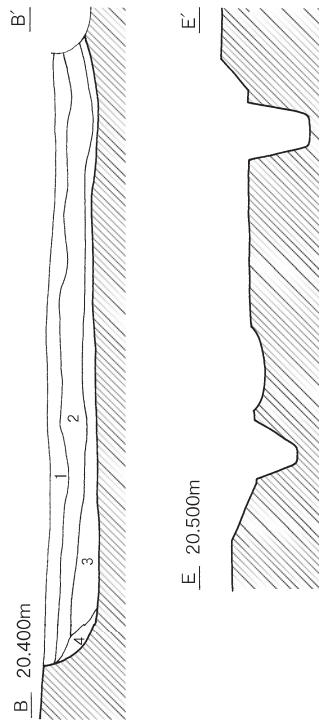
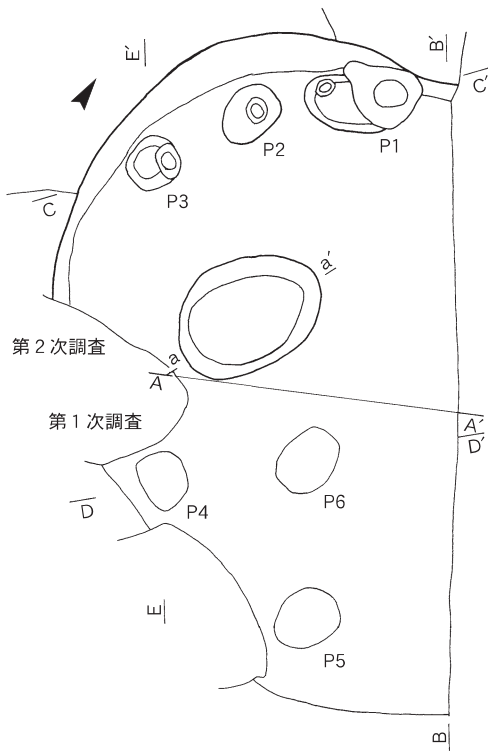
15、16は勝坂Ⅱ式の胴部片である。15は円形のモチーフを取り囲む隆帯に太い押圧を施す。16は端部が先鋭する弧状の隆帯に押圧を連続して施す。

17は縦位の集合沈線を胴部に充填する深鉢形土器である。

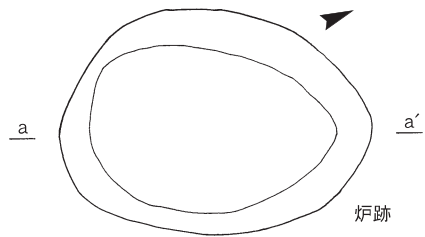
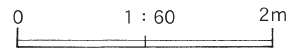
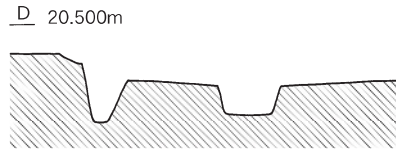
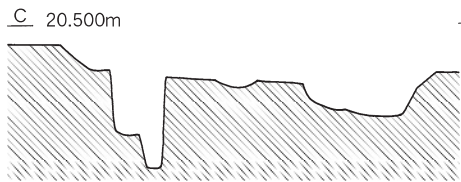
18、19は浅鉢形土器である。18は無文で胴部に屈曲部を有する。19は横位の波状隆帯を口縁部に施す。

20~30はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部片である。20は平口縁で弧状の隆帯が口唇部直下から垂下する。横位の隆帯には斜状の刻みを施す。21は地文上を隆帯が横走して主文様となる。22は平口縁で渦巻文と楕円形区画文を交互に配する。頸部は屈曲し、3条の沈線が廻る。23は口唇部に小突起が配される。円形の隆帯からC字状の隆帯が派生し、口唇部から斜行する隆帯が口縁部文様帯へ貫入する。中峠系であ

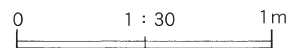
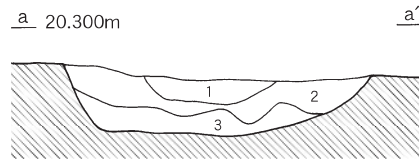
第Ⅲ章 台地上の調査（第1次～第3次調査）



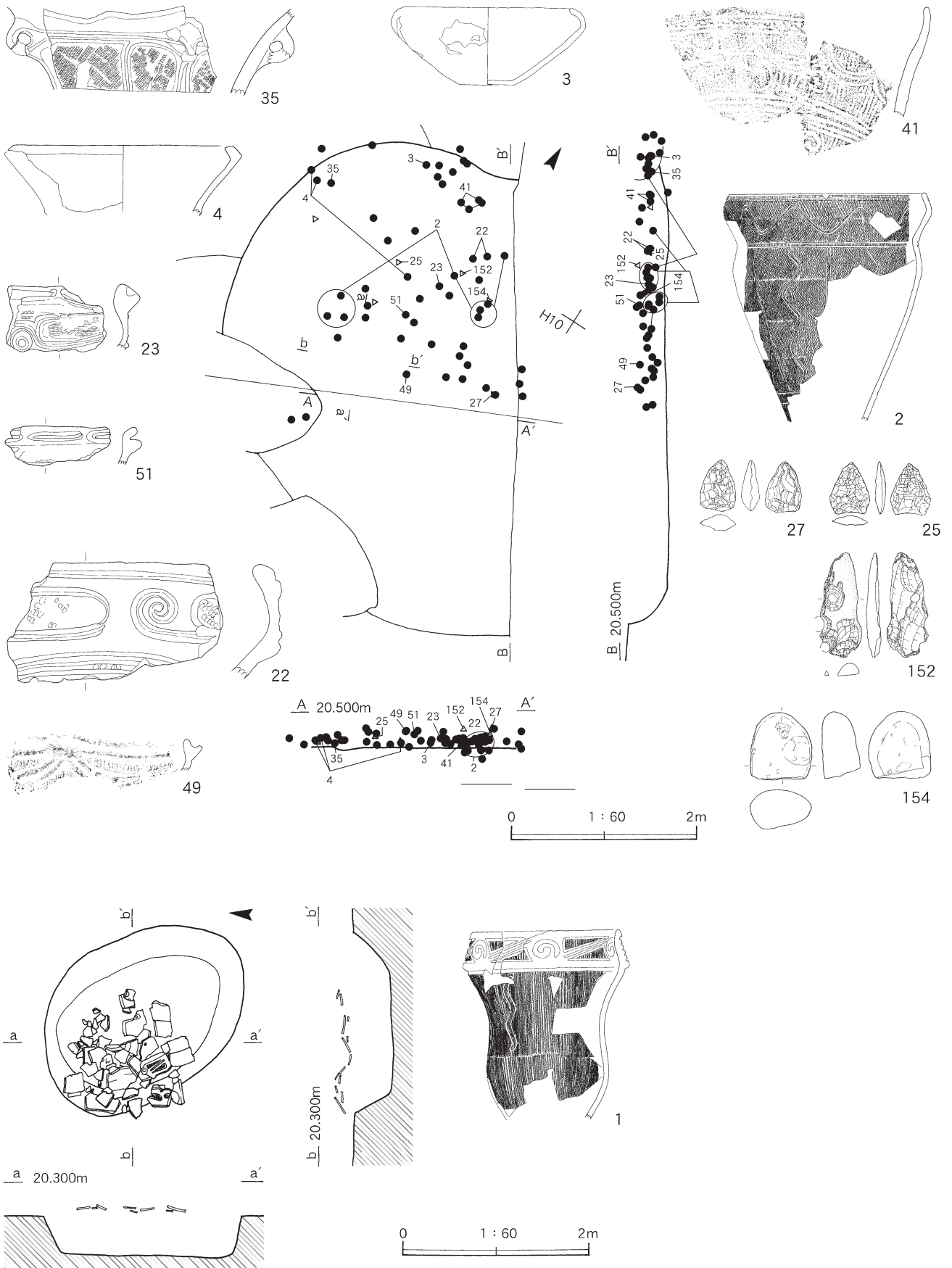
- 第1層 明茶褐色土 ローム粒子多く、焼土・炭化物粒子若干含む
- 第2層 黄茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多く含む
- 第3層 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子多く含む
- 第4層 茶褐色土 焼土粒子・ローム粒子多く含む



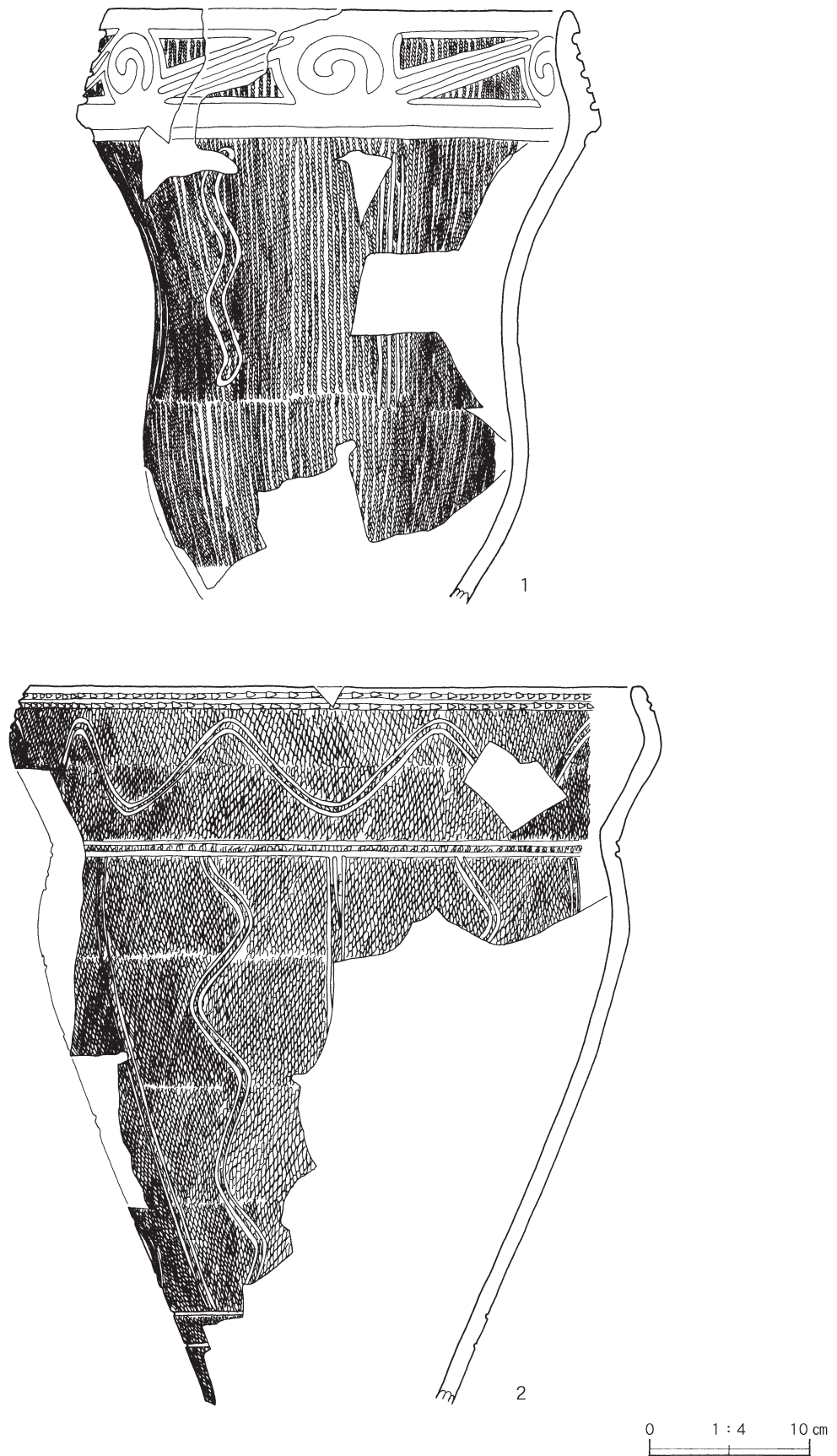
- 第1層 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多く含む
- 第2層 茶褐色土 焼土粒子多く、炭化物粒子若干含む
- 第3層 暗黄茶褐色土 焼土・炭化物粒子若干含む



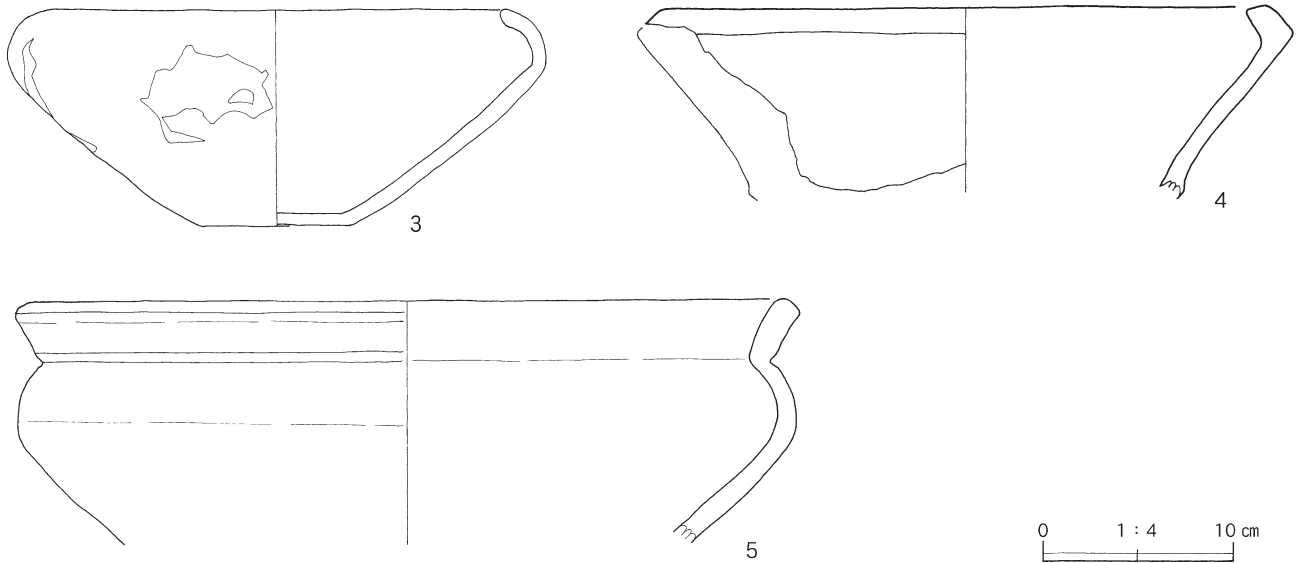
第132図 15号住居跡



第133図 15号住居跡遺物出土状況



第134図 15号住居跡出土遺物（1）



第135図 15号住居跡出土遺物（2）

ろう。24は口唇部に沈線が廻り、内側へ庇状に隆帯が廻る。25は渦巻文から横位に2本の隆帯が派生して横走する。下部は3本の短沈線が頸部に接続する。26は渦巻文が頸部を区画する隆帯に変化し、楕円形区画文を構成する。27は波状口縁を呈し、口唇部に小突起を有する。口縁部には楕円形区画文を描く。28は口唇部の直下が肥厚し、隆帯状となって下部の2本隆帯と楕円形区画文を構成する。29は口唇部の直下に集合沈線を施し、密な沈線の渦巻文が突起状に外側へ突出する。30は連続する楕円形区画文を描く。

31～36は口縁部から頸部の破片である。31は口縁部の区画文内の地文が磨り消される。頸部との区画は隆帯が1条廻り、懸垂文を施す。32は口縁部の楕円形区画文を隆帯で描く。33は頸部から楕円形の隆帯が垂下する。34は口縁部に施した縦位の隆帯が胴部まで貫入する。35は頸部無文帯から施される縦位の橋状把手が胴部の懸垂文へ接続する。36は口縁部の楕円形区画文を胴部の懸垂文と一連のモチーフとして描く。

37～40は胴部片である。37は地文上には沈線による懸垂文とこれを横位に繋ぐ弧状の文様を描く。38は平行沈線の懸垂文を弧状の沈線で梯子状に接続する。39は浅い3条の懸垂文である。40は底部の資料で、底面直上は横位の無文帯となる。

41～48は連弧文土器である。41は口唇直下に交互刺突文が廻り、上部の文様帯は3条の弧線文が横走する。また、円形の付帯文を施す。胴部の区画文は5条の沈線で、弧状の付帯文が派生する。42は口縁部片で、口唇部直下に連続する刺突文が廻る。43は半裁竹管により弧線文を描く。44は弧線文が小波状に描かれる。45、46は胴部下半の文様帯で、玉抱き三叉文が派生する。47は連続する沈線文を描く。48は縦位の波状文である。

49、50は同一個体であろう。口縁部文様帯に繋ぎ弧文を配し、弧状の隆帯の端部には上向きに小渦巻文を施す。地文は集合沈線で、頸部に広い無文帯を有する。

51～54は中峠系の土器である。51は平口縁で、口唇部直下に横長の鎖状隆帯が連続する。52～54は波状口縁を呈し、波頂部に渦巻文を配する。52、53は渦巻文が上向きで口唇部の沈線へ連続する。54は渦巻文から派生する隆帯が胴部へ垂下する。

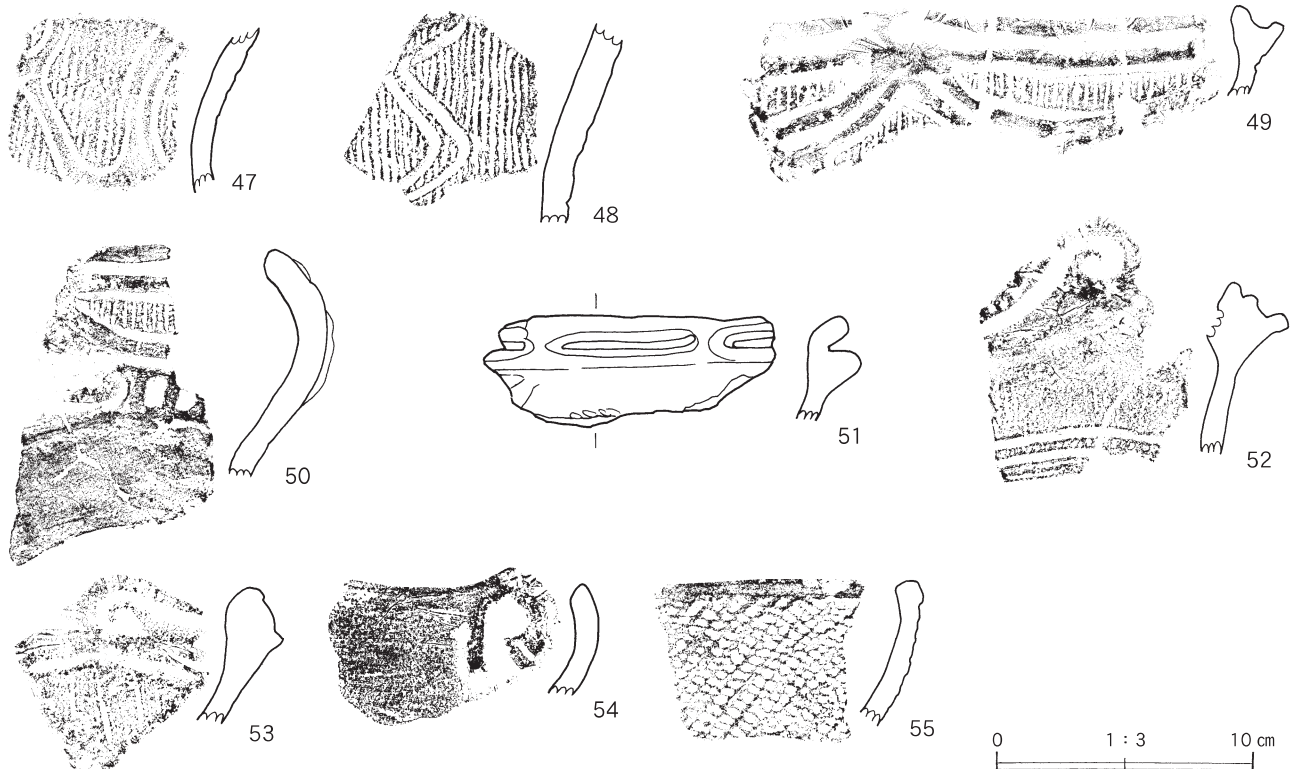
55は口唇部直下に幅の狭い無文帯を設け、器面はLRの単節縄文を全面に施す。加曾利EⅡ式である。



第136図 15号住居跡出土遺物（3）



第137図 15号住居跡出土遺物(4)



第138図 15号住居跡出土遺物（5）

16号住居跡（第139・140図、第28表）

住居跡はF10グリッドに位置する。住居の西側は11号住居跡に壊される。平面形は円形を呈し、長径4.9m、短径4.5m、深さは0.3mの規模である。主軸はN-8°-Wを指向する。床面はほぼ平らで、壁面は緩やかに立ち上がる。壁溝は検出しなかった。

住居の覆土はロームブロック、炭化物粒子を含む黄茶褐色土を主体に堆積する。遺物の出土は住居の東側から流れ込んだ状況が観察された。住居の廃絶後に土器の廃棄行為が行われた結果と想定される。

炉跡は埋甕炉で、底部を欠いた大型の深鉢形土器を埋設しており、床面の東寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径142cm、短径94cm、深さ38cmを測る。壁面は北側がやや急に立ち上がる。覆土は焼土ブロックが堆積する淡黄褐色土を主体とする。主軸はN-22°-Eを指向する。

ピットは床面から8基が検出され、このうちP1～P6が支柱穴になると想定される。それぞれの深さはP1-96.9cm、P2-59.7cm、P3-61.8cm、P4-49.8cm、P5-67.0cm、P6-66.6cmである。

住居跡の帰属時期は、出土した炉体土器等から加曾利EⅡ式期に属するものと考えられる。

第28表 16号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	58.0	96.9	P4	40.0	49.8	P7	52.0	57.4
P2	47.0	59.7	P5	46.0	67.0	P8	30.0	29.6
P3	56.0	61.8	P6	58.0	66.6			

16号住居跡出土土器（第141～143図）

1は炉体土器で、平口縁のキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部から胴部上半まで残存していた。立ち上がりは緩く外反し、口縁部は直立して端部がわずかに内屈する。口縁部文様帯は隆帯による弧状のモチーフの端部に渦巻文を配し、楕円形と三角形の区画文を組み合わせて7単位に廻る。弧状の隆帯は一部で頸部と縦位の短隆帯で繋がる。頸部は広い無文帯を有し、胴部との境は横位の隆帯が2条廻る。胴部は隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文を交互に配する。土器の口径は50.5cmで、現存高は38.0cmである。胎土には片岩の細礫を多く含む。色調は内外面とも暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2は住居の南壁直下から出土した深鉢形土器である。胴部は直線的に立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部文様帯は渦巻文と楕円形区画文が組み合わされ、4単位が廻る。均一な割り付けがされず、2単位については区画文が長く伸び、内部に繋ぎ弧文状のモチーフを沈線により充填する。頸部は広い無文帯で、地文を消しきれずに一部が残存する。胴部との区画はヘラ状の工具による浅い横位の沈線が廻り、同様に沈線による懸垂文と蛇行懸垂文を配する。土器の口径は27.0cmで、残存高は20.5cmである。胎土には細礫、砂粒が含まれる。色調は内外面とも明褐色を呈し、焼成は良好である。

3～17は勝坂土器である。3は口縁部無文帯直下に、短沈線が施された隆帯の区画文を配する。4は浅鉢形土器と考えられ、隆帯の楕円形区画文内に横位の沈線文を充填する。5は円筒形の深鉢形土器で、口縁部無文帯直下に半肉彫状の文様を施す。6は口唇部直下の突起で、外側に突出する。刻みを有する隆帯が蜷局状に巻き上がる。7は山形状突起の一部で、表裏に文様を施す。周縁部には刻みと押圧を施す。8は弧状の隆帯に交互の短沈線を施し、区画文を構成して内部に三叉文を施す。9は弧状の隆帯に刻みを施す。内部は隆帯に沿った沈線を配し、広く無文である。10～12は隆帯に沿った爪形文で弧状のモチーフが描かれる。13は隆帯に沿って爪形文と小波状の沈線文を描く。14は隆帯直下の地文上に小波状の沈線文を描く。15は横位の隆帯に直行するように集合沈線を施す。16は隆帯上にLRの単節縄文を施す。突起状の円形隆帯から弧状の隆帯が派生する。17は半裁竹管による横位の集合沈線を施す。

18～23は阿玉台式土器である。18は突起部で細かい三角押文を表面に施す。裏面には円形の隆帯文が周縁を肥厚させた三角形の区画に充填される。19は屈曲部に角押文が横走する。20は隆帯に沿って角押文を施す。21は連続した三角押文によるモチーフを描く。22は2条の隆帯による区画文である。23は縄文を施した隆帯に沿って2列の沈線を描く。

24は深鉢形土器の中空突起である。裏面には大きな貫通孔を有する。口縁部文様帯の隆帯が橋状の隆帯に変化し、口唇部から派生した扇状の突起と結合する。突起の端部には刻みを施す。

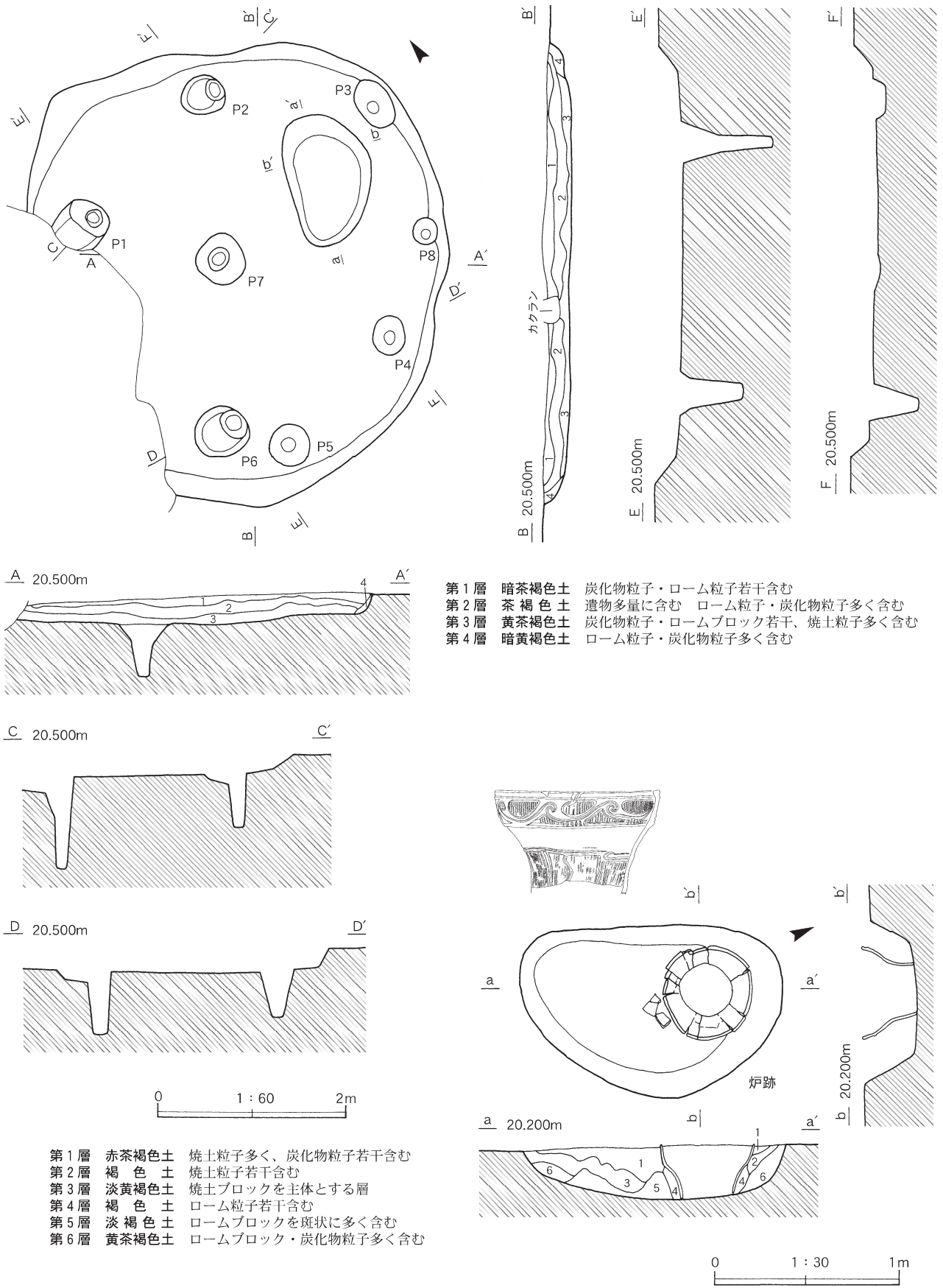
25～28は深鉢形土器の口縁部片である。25は地文上に1条の隆帯が渦巻文を描出する。26は端部が先鋭し、内湾する器形である。27は区画文を構成する下部の隆帯から渦巻文が派生する。28は口唇部直下に突起を有する。突起には左右から沈線が配され、端部で巴状に交互に交わる。

29～34は口縁部片である。29は平行する隆帯が口縁部文様帯を上下に2分し、ここから2本隆帯が派生して弧状のモチーフを描く。30は沈線による方形の区画文を描く。31、32は縦位の隆帯が頸部を区画する隆帯と直交する。33は地文が縦位の撚糸文である。34は隆帯による渦巻文である。

35～41は胴部片である。35は頸部に地文が残され、隆帯による蛇行懸垂文を施す。36は頸部無文帯を有し、隆帯沿いは幅広く磨り消している。37は懸垂文と蛇行懸垂文を交互に貼付する。38の地文は縦位の集合沈線である。39は沈線による蛇行懸垂文である。40、41は地文のみで、それぞれ縦位の撚糸文である。

42は深鉢形土器の底部片である。弧状の2本隆帯によるモチーフを描く。

43～49は浅鉢形土器である。43～48は無文である。このうち43～45は口縁部が矩形に肥厚し、最大径を胴



第139図 16号住居跡



第140図 16号住居跡遺物出土状況



第141図 16号住居跡出土遺物（1）

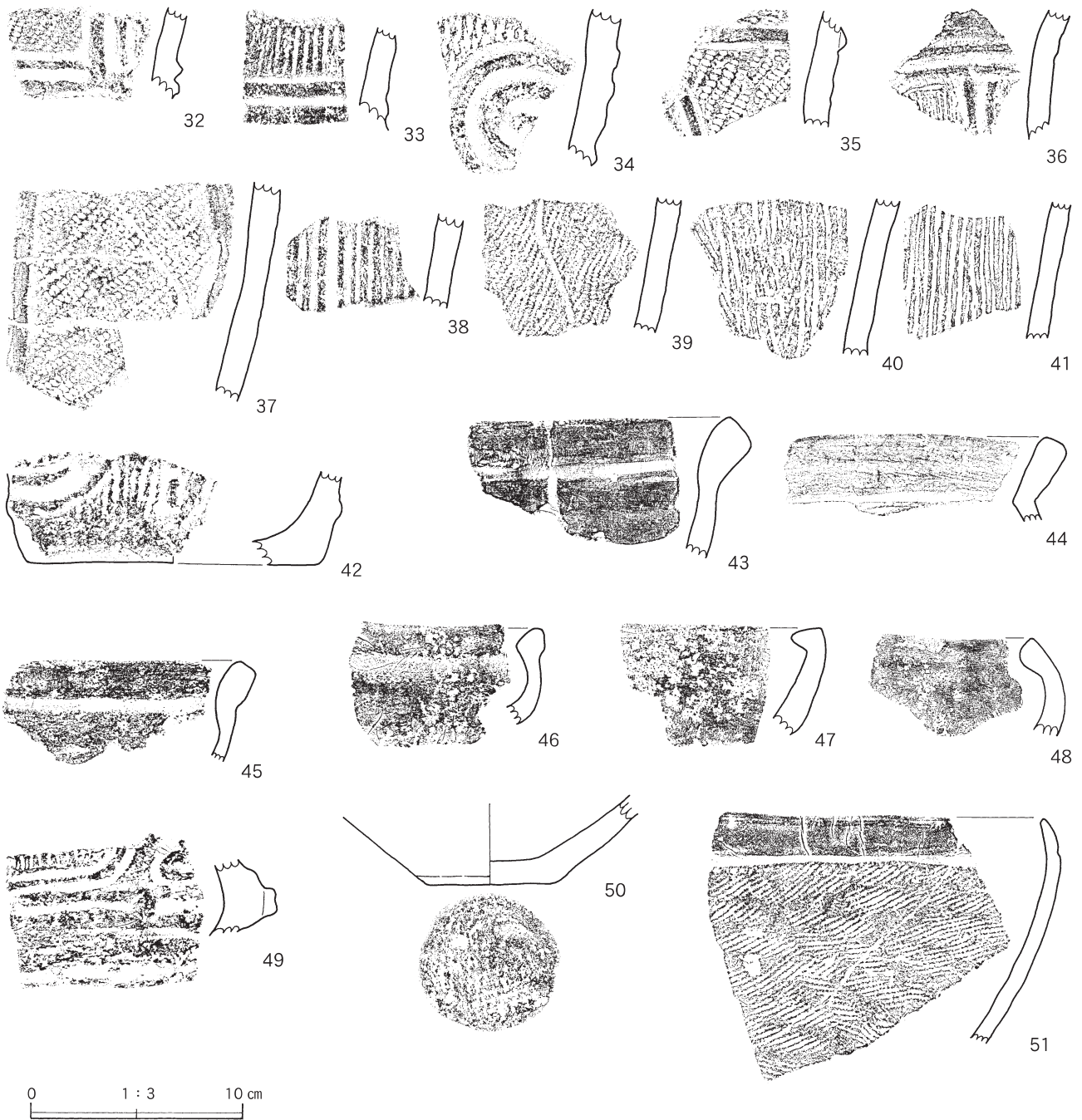
部上半とする器形である。46は小型で碗形を呈する。47は口唇部が内側へ突出し庇状である。48は口縁部が肥厚し内湾する。49は胴部と頸部の屈曲部である。胴部は無文で、頸部は隆帯による楕円形区画文を配する。

50は浅鉢形土器の底部片である。底面に網代圧痕を残す。

51は口縁部に無文帯を設け、沈線で区画する。直下の胴部は稜をもって盛り上がり、全面的に地文を施す。加曾利 EⅢ式の鉢形土器である。



第142図 16号住居跡出土遺物(2)



第143図 16号住居跡出土遺物（3）